

バン格拉デシュ・タンザニア現地ODAタスクフォース主催

援助の現場と日本を結ぶ開発セミナー

「途上国の人たちとともに未来を創る！」

報告書

2006年3月

主催 : 外務省、JICA、JBIC

協力 : YDP Japan Network、(特活)シャプラニール = 市民による海外協力の会、
世界銀行東京事務所、「ほっとけない 世界のまずしさ」キャンペーン事務局、
ユニセフ東京事務所、JANIC、FASID

はじめに

今、途上国では何が起きているのでしょうか。
現場で働く日本人はどんな壁にぶつかって、
その壁をどうのり越えているのでしょうか。

現地からの生の声に耳をかたむけてみませんか？
途上国で生活し、現場のニーズを肌で感じながら、
日々相手の国と向き合って援助事業を進めているのは、
現地で働く援助関係者たちです。
彼らは、その国の将来を見据えながら、
相手国の人々と共に悩みながらも前向きに仕事に取り組んでいます。

日本大使館・JICA・JBIC 現地事務所を主要メンバーとする
「現地 ODA タスクフォース」は、現在 69 カ国で立ち上がっています。
日本の援助の政策立案や事業の実施能力を高め、
他の援助国・機関との連携を強めていくことを目的として、
現地の日本の援助関係者が一丸となって取り組んでいます。

今回のセミナーは、現地 ODA タスクフォースのイニシアティブで、
バングラデシュとタンザニアの 2 ヶ国、
そして東京と大阪をテレビ会議システムで結ぶ、初めての試みです。

現地で働く日本人の援助関係者の一人一人から、
全力投球のメッセージをお届けしました。
途上国で起きている問題や、それらに対する日本の取組み。
現地 ODA タスクフォースの現状と、関係者間の連携の必要性。
そして、開発問題の解決に賭ける夢。

これに対して、日本のユース団体や会場からの参加者から、
「自分たちができる国際協力」への提案がありました。
途上国開発に関わるユースが現場との距離を縮めること。
開発に取り組む人材を拡大すること。
開発教育の改善に向けて開発と教育の現場の橋渡しになること。
なによりも、一人一人ができること。

途上国の現場で働く日本人が日々何を感じ、
どのように取り組んでいるかを知り、
国際協力の必要性や日本にいる私たちが今できることについて
皆と一緒に考えてみませんか。
きっとあなたにもできることが見つかります！

この報告が、気持ちを行動に変えていくきっかけになりますように。

タンザニア現地 ODA タスクフォース
バングラデシュ現地 ODA タスクフォース

横林直樹
紀谷昌彦

目次

1. プログラム	1
2. 総括	2
2.1. セッション1 現地 ODA タスクフォースからの報告	3
(1) バングラデシュ	3
(2) タンザニア	6
2.2. セッション2 日本のユースからの発信および全体討議	10
(3) YDP Japan Network (開発にかかわるユース団体ネットワーク) からの発信	10
(4) 会議参加者と現地 ODA タスクフォースとの討議	15
3. 実施体制	19
4. 資料	21
4.1. 提案用紙回収結果	21
(1) 自分にできること (回答数 99 件)	21
(2) 質問・期待していること (回答数 90 件)	21
4.2. アンケート結果	31
(1) どのようにしてセミナーの開催をお知りになりましたか	31
(2) 印象に残った内容は何ですか (複数回答)	31
(3) 「自分にできる国際協力」を考える機会になりましたか	31
(4) セミナー全体の印象	31
(5) 職業	31
(6) 性別	31
(7) (2) 印象に残ったプログラムにて該当プログラムを選んだ理由	33
4.3. 意見・感想	38
(1) 肯定的な意見・感想	38
(2) 批判的な意見・感想、或いは要望	39
(3) 提案・情報提供希望	40
(4) その他	41

別添 1	現地 ODA タスクフォースの説明
別添 2	バングラデシュ 現地 ODA タスクフォースの概要
別添 3	バングラデシュ ダッカの都市環境を知ろうツアー ♪
別添 4	バングラデシュ 水道公社の経営再建
別添 5	バングラデシュ ダッカのストリートチルドレン支援活動
別添 6	タンザニア 現地 ODA タスクフォースの概要
別添 7	タンザニア マラリア対策
別添 8	タンザニア 援助関係者としてのキャリア形成
別添 9	セッション2 YDP Japan Network
別添 10	提案用紙
別添 11	アンケート用紙

1. プログラム

日時 : 2006 年 3 月 11 日 (土)

於 : JICA 国際協力総合研修所 (東京) JICA 大阪 (大阪)

主催 : 外務省、JICA、JBIC

協力 : YDP Japan Network、(特活)シャブラニール=市民による海外協力の会、世界銀行東京事務所、
「ほっとけない 世界のまずしさ」キャンペーン事務局、ユニセフ東京事務所、JANIC、FASID

総参加者数 246 名 (東京:199 名、大阪: 47 名)

時間	内容
14:00	開会 (総合司会: 白幡利雄 (特活) シャブラニール=市民による海外協力の会 前ダッカ事務所長)
	現地 ODA タスクフォースの説明 (浜田圭司 外務省経済協力局国別開発協力第二課課長補佐)
セッション 1 現地 ODA タスクフォースからの報告	
14:10 ~	I バングラデシュ
	現地 ODA タスクフォースの概要 (紀谷昌彦 日本大使館経済協力班長)
	ダッカの都市環境を知ろうツアー ((武士俣明子 JICA バングラデシュ事務所所員)
	水道公社の経営再建 (永井進介 JBIC バングラデシュ事務所駐在員)
	ダッカのストリートチルドレン支援活動 (藤岡恵美子 (特活) シャブラニール=市民による海外協力の会ダッカ事務所長)
14:45 ~	II タンザニア
	現地 ODA タスクフォースの概要 (横林直樹 日本大使館経済協力班長)
	マラリア対策 (金森将吾 JICA 専門家、守屋貴裕 JICA タンザニア事務所所員)
	援助関係者としてのキャリア形成 (鈴木裕子 UNDP タンザニア事務所アソシエートエキスパート)
15:20 ~ 15:30	休憩
セッション 2 日本のユース及び参加者からの発信	
15:30	YDP Japan Network (開発にかかわるユース団体ネットワーク) からの発信
~17:00	会議参加者と現地 ODA タスクフォースとの討議
	まとめ
17:00	閉会
17:00	相談コーナー (主催・協力団体の活動紹介及び皆さまからのご相談を受付ます)
19:00	終了 (大阪会場は 18:00 まで)



総合司会: 白幡氏



現地 ODA タスクフォースの説明: 浜田氏

2. 総括

特定非営利活動法人
シャプラニール = 市民による海外協力の会
白幡利雄

セミナー当日の参加者総数は、東京と大阪の各会場の合計でなんと 246 人（東京 199 人、大阪 47 人）でした。この人数に、今回のセミナーの意義や成果がすべて集約されているといっても過言ではないように思います。私自身、シャプラニールという日本の NGO スタッフとして 10 年以上活動していますが、一度のイベントで 200 人以上の人を集めることの大変さは十分すぎるほど経験しているので、この数字の持つ意味がよく分かるのです。

なぜ、こんなにも多くの方々を集めることができたのでしょうか？

それは、「顔が見える」セミナーだったからに違いありません。テレビ会議を活用し、発表者、参加者、みんなの顔が文字通り「見える」ということが非常に大きなインパクトをもっていたのだと思います。バングラデシュで自然災害が頻発していること、タンザニアで平均余命が悪化していること、そしてそれらの課題に対してどのような取り組みがなされているのかということなどは、勉強しようと思えばいくらでも方法はあります。しかし、そこに携わっている人々がどんな顔をしていて、しゃべり方や声はどんな感じなのか、といったことは実務で顔をあわせる機会がない限り、ついぞ知り得ないことだったのです。

最近あまり聞かれなくなったように思いますが、以前は「顔の見える援助」という言葉がいたるところで使われていました。一般的には、日本という「顔」を、その支援の相手先である国や地域の人々にとって見えるものにする、つまりはもっと日本の貢献を知らしめる、という文脈で用いられることが多かったものです。しかし私は、この言葉だけでは「顔を見せる援助」であるという誤解を生んでしまうため、「お互いの顔が見える援助」と言い換えるべきだ、それも単に日本と途上国との間だけでなく、日本の援助実施機関（者）と一般市民との間においても必要なことだ、とずっと考えてきました。その意味で、今回のセミナーは参加者のニーズに応えるものであったというだけでなく、本来すべきことを行ったという側面でも認識される必要があると思います。

今後、こうしたセミナーをもっと開催すべきだ、と言って総括としてしまうのは簡単ですが、実際には今回だけでも合計 43 人の方々が裏方として準備と実施に関わって下さいました。他にバングラデシュとタンザニア現地での関係者も多くいらっしゃいます。開発に取り組むユース団体のネットワークである YDP Japan Network の発表にもあったとおり、「まずは身近な人へ一人一人伝えていくこと」の大切さを、参加した私たち自身が改めて噛みしめ、各々ができる方法で国際協力、海外協力の輪を広げていくこと。それこそが、セミナーのタイトルであった「途上国の人たちとともに未来を創る」ことに他ならないのだと思います。

これからも、ともに歩いていきましょう！

2.1. セッション1 現地 ODA タスクフォースからの報告

(1) バングラデシュ

現地 ODA タスクフォースの概要

[発表者]在バングラデシュ日本大使館経済協力班長 紀谷昌彦

[要 旨]「援助は現場で起きている！」- 途上国の現場を中心に、組織を超えたオープンなネットワークを構築することで、開発援助の新たな可能性を開拓します！

途上国の現場は、なぜ大事なのでしょう。それは、途上国の人たちの置かれた状況と正面から向かい合い、五感を総動員してそれを理解し、直接お互いに考えをぶつけあい、そして問題解決に向けて皆と一緒に取り組むことができるからです。現場で何が起きているかを知ることなくして、開発問題は語れません。

バングラデシュでは、現地 ODA タスクフォースの先駆的なモデルとして、新たな取り組みを進めています。組織を超えて分野ごとにチームを編成し、インターネットを活用して積極的に情報発信・情報共有を行い、そして NGO や国際機関・研究機関・民間企業や学生の皆さんとのオープンなネットワークを構築して対話と連携を深めています。

現場から見ると、開発問題の解決に向けて、本当に多くの人たちが貢献していることがわかります。途上国の人たち自身を中心に、日本人のみならず世界各国や国際機関の人たちも、皆協力して、世の中の不幸が少しでも少なくなるように努力しています。あなたは、もしかすると途上国に生まれたかもしれません。あなただけ豊かで良いのでしょうか。それが本当の幸せなのでしょう。一人の日本人として、身の回りからできることをはじめましょう。あなた自身の良さを発見して、世界のために活かしてください。



バングラデシュ（紀谷氏）からの報告

ダッカの都市環境を知ろうツアー」

[発表者]JICA バングラデシュ事務所員 武士俣明子

[要 旨]人の意識と行動を変える、『人づくり』が JICA のミッションです！

ダッカの都市環境問題は、人口増加、産業の発展、そこに暮らす人々の意識の問題まで、様々な要因が絡み合って深刻化しています。今回のツアーで例として取り上げた、JICA の廃棄物問題に対する協力事業は、ダッカ市(DCC)の行政としての将来計画もシステムも無く、住民もそこら中にポイ捨て当たり前のゼロの状態からスタート。日本人関係者の汗と笑いなくしては語れない粘り強い努力が、DCC 職員や住民の意識を徐々に変えていきました。お互いの信頼関係の上に積み上げる、技術移転と人材育成。それを彼らのものとして相手の国に根付かせること。抽象的ですが、これが技術協力の仕事です。

セッション1 現地ODA タスクフォースからの報告

また、バングラデシュで暮らし、バングラデシュの課題を体で感じながら、日々技術協力事業に取り組む現地の JICA 関係者が、どのような視点で物事を見、どのような仕事に取り組んでいるのか、面白さと苦労は何なのか、今回のセミナーを通じて、少しでも現場の視点を感じていただけたなら幸いです。そして、写真ではなく、自分の目と足でダッカの都市環境を感じてみたいと思った方！その気持ちを次の一歩につなげてみて下さい。好奇心と行動力から全てが始まります。



バングラデシュ（武士俣氏）からの報告

水道公社の経営再建に挑む!!

[発表者]JBIC ダッカ駐在員事務所 駐在員 永井進介

[要 旨]

国際協力銀行（JBIC）は、低金利で返済期間の長い緩やかな貸付条件で、国の発展の土台となる「経済インフラ」を中心に、開発途上国の経済社会基盤の整備に必要な資金（円借款）を貸し付けています。「経済インフラ」と言ってもその分野は広く、例えば運輸（道路、鉄道、港など）、電力（発電所、送電所など）や社会サービス（上下水道など）等にまで及びます。

「開発セミナー」を通じて、私が皆さんに伝えたかったメッセージは、

『経済インフラを整備することは、もちろん重要です。ただそれ以上に、円借款により整備された経済インフラがその後何十年にもわたって、適切に維持、管理、運営されるような体制作りを実現していくことが更に重要である。』 という事です。

このメッセージへの理解を深めていただくために、今回は経営破綻の危機にあった「チッタゴン上下水道公社（CWASA）の経営再建」について紹介致しました。具体的には、バ政府高官の決断、経営陣のリーダーシップを通じて、不可能とされていた CWASA の財務改革が次々に実現され、稼いだ利益をすべて債務返済に当てるのではなく、上下水道施設の維持管理費用や新規投資にも回せるようになりつつあるほか、経営、組織、技術、広報等の業務改革を通じて、CWASA 職員の仕事に対するモチベーションが大きく向上し始めたことを紹介致しました。我々は、このような財務、業務改革への支援を通じて、CWASA 職員一人一人の仕事に対する「やる気」や「責任感」を引き出すことで、円借款により整備された上水道施設が、適切に維持、管理、運営され、長期にわたって所期の効果が発現されるよう努めています。

私の夢は、自立した経営を実現した CWASA のもとで、円借款で整備された上水道市施設が適切に運営され、一日でも早く、チッタゴン市民に「安全で安価な水」を供給できるようになることです。これにより、バングラデシュの貧困が緩和されるのみならず、その恩恵は

セッション1 現地ODA タスクフォースからの報告

民間企業にもおよぶことから、日本からの投資の増加を通じて、日本とバングラデシュの経済交流の拡大に繋がるものと信じております。

最後になりましたが、皆さん、お忙しいところ「開発セミナー」にご参加頂きありがとうございました。多くの日本人が、様々な方法で、開発途上国の発展のために日々奮闘している姿を感じていただけたのではないのでしょうか。今後、一人でも多くの皆さんが国際協力という仕事に興味を持ち、私達と一緒に開発途上国の国作りに参加してくれることを楽しみにしております。百聞は一見にしかず、まずは勇気をもって、その一步を踏み出してみてください。それでは、開発途上国の現場でお会いしましょう。



バングラデシュ（永井氏）からの報告

ダッカのストリートチルドレン支援活動

[発表者]シャプラニール＝市民による海外協力の会 ダッカ事務所長 藤岡恵美子

[要 旨]すべての人が持つ「生きる力」を信じ、「自立への努力」を側面から

サポートすること。同時にわたしたちの生活の在り方を考えること。それがシャプラニールのモットーです。

開発セミナーにご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

今回のセミナーで私がお伝えしたかったのは以下のようなことです。

子どもがストリートチルドレンになる理由や経緯はいろいろあるけれども、貧困だけが原因ではなく、家庭内に問題がある場合が多いこと。また、“問題”なのは子どもたちではなく、子どもたちに暴力を振るったり搾取したりするおとなの側であること。そして、その状況を変えていくためには、地域住民への働きかけと子どもたちのエンパワーメントが不可欠であることです。さらに、この活動では手が届きにくい女の子への支援や、子どもたちが路上に出てくる前に防止するための農村での活動を今後の課題としてあげました。

日本でも皆さんにご協力いただけることはいろいろあります。フェアトレード商品を買っていただくこと、要らなくなった本やCDを寄付していただくことなど、ちょっとしたことです。立派な海外協力です。ぜひ身近なところから一步を踏み出していただけると願っています。



バン格拉デシュ（藤岡氏）からの報告

（２）タンザニア

現地 ODA タスクフォースの概要 ―特に財政支援について―

[発表者]在タンザニア日本大使館経済協力班長 横林 直樹

[要 旨]

- 1) タンザニアの概要及び特徴：別紙タンザニア ODA タスクフォース資料
- 2) タンザニアの貧困削減戦略：別紙タンザニア ODA タスクフォース資料
- 3) 一般財政支援（GBS）
 - ・ タンザニアでは 2000/01 会計年度から開始され、2005/06 年度で 6 年目になり、参加ドナーはバイドナーとマルチドナーを合わせた 14 ドナーである。
 - ・ タンザニアでは日本が無償資金協力の形態を利用して年間 5～6 億円を投入している。日本が無償資金を投入して GBS に参加している唯一の国である。
 - ・ GBS による支援総額は約 700 億円にのぼり、タンザニアに対する支援全体の援助額の内 36%を占める。セクター毎に資金を投入するバスケットファンドと GBS を合わせると全体援助額の約 55%を占め、残り約 45%がプロジェクト援助となっている。
 - ・ タンザニア国家予算全体に占める GBS の割合は約 16%である。
 - ・ 国家予算の約 40%が外国からの援助で賄われており、タンザニアは援助への依存率の高い国である。
 - ・ 4. GBS をプロジェクト援助と比較した際の利点
 - ・ 政府が優先する分野に資金を投入できるため、政府側のオーナーシップが高まる。
 - ・ プロジェクト援助とは異なり GBS では資金の予測可能性が高まる。つまり年度前に GBS からの資金を把握できるため政府が計画、戦略を立てることができる。
 - ・ 政府の財政システム構築を促進することができ、開発における政府システム造りに貢献できる。
 - ・ 点(プロジェクト)の成果を全国展開するために予算を活用できる。

セッション1 現地ODA タスクフォースからの報告

- ・ 予算を経常予算へ充当できるため、政府担当者のインセンティブ向上につながる給与やプロジェクト成果の長期的な維持・管理費などに予算を当てることができる。



タンザニア（横林氏）からの報告

タンザニアでのマラリア対策 ―日本の取り組みについて―

[発表者]マラリア対策アドバイザー 金森 将吾

JICA タンザニア事務所員 守屋 貴裕

[要 旨]

- 1) タンザニアでのマラリア対策の概要：別紙タンザニアでのマラリア対策(日本の取り組みについて)資料
 - ・ タンザニアでは毎年約 10 万人がマラリアにより死亡しており、マラリア対策は急務である。
- 2) タンザニアでのマラリア対策への日本の取り組み：別紙 2、3 タンザニアでのマラリア対策(日本の取り組みについて)資料
- 3) 包括的マラリア対策プロジェクト
 - ・ プロジェクトは臨床検査技師の検査技術と看護師の看護能力の強化を活動の一つとして行っており、研修後のモニタリングとフォローアップを重視し、伝えた知識や技術が実際に現場で使われることを目標としている。
 - ・ マラリア診断強化で推奨している検査方法(アクリジン・オレンジ法)は、日本で 10 年前に開発されたものを活用している。
- 4) 長期残効蚊帳の配布
 - ・ 実際に必要な人(例：妊婦、乳幼児)の手元に蚊帳をきちんと配布するために、経験・ノウハウのある NGO と連携して蚊帳の配布を行ったことが本事業のポイントである。
 - ・ タンザニア政府が蚊帳やコンドームなどの社会的に必要な資材についてソーシャルマーケティングを推奨しているため、この方針に合わせ、蚊帳を無料で配布するのではなく、割引した価格で販売して所有者の意識付けをし、より持続的に蚊帳を使用してもらえるようにした。



タンザニア（金森氏、守屋氏）からの報告

援助関係者としてのキャリア形成

[発表者]UNDP タンザニア事務所アソシエートエキスパート(JPO) 鈴木(ナブ)裕子

[要 旨]

1) 自身のキャリア形成の経験

- ・ 大学時代に訪問したモロッコで先進国と途上国の生活環境の違いを実感したことがきっかけとなり、その後アメリカの大学院にてアフリカを中心とする開発について勉強をした。
- ・ 大学院在学中にガーナの現地コンサルタントでインターンシップを行い、卒業後はワシントン DC のコンサルタント会社を経て、USAID 関連のプロジェクト管理に計 4 年間従事した。
- ・ JPO に合格し、現在 UNDP タンザニアに勤務して 2 年 3 ヶ月になる。

2) タンザニアでの業務：別紙 4 UNDP グローバル、UNDP タンザニアの事業

- ・ 援助協調関連の仕事が多く、UNDP が務めているドナー会合での議長のサポートや事務局の運営を担っている。
- ・ UNDP 事務所には約 100 人のスタッフが勤務をしており、うち 12 名が国際スタッフである。国際スタッフの内訳は正規職員 3 名(所長 1 名と次長 2 名)、JPO4 名、UNV2 名、LEAD スタッフ 1 名、契約ベースの専門家 2 名の計 12 名の国際スタッフが働いている。

3) UNDP でのキャリア形成

- ・ JPO として UNDP に入り、その後契約ベースの専門家として UNDP での勤務を続け、正規職員の枠が空くのを待つという道がある。
- ・ LEAD として UNDP に入る。LEAD とは UNDP の正規職員になるための公式なプログラムで、年に約 15 人が LEAD として UNDP に雇用されている。
- ・ 契約ベースの専門家として UNDP に入り、正規職員の枠が開くのを待つという道もある。
- ・ 専門家は契約ベースでフィールド事務所に配置されるのが一般的であるが、地域センターやニューヨークの本部で開発政策アドバイザーとして雇用される機会も増えている。
- ・ UNDP には様々な戦略やプログラムを管理する仕事が多いため、ジェネラリストが多い。

4) JPO のプラス面：別紙 4 UNDP グローバル、UNDP タンザニアの事業

セッション1 現地ODA タスクフォースからの報告

- ・ やりがいのある仕事に関われるので充実感がある。
- ・ 最前線(援助協調など)で経験を積むことができる。(特にタンザニア)

5) 求められる資質

- ・ 関係者との人間関係の中で忍耐性を求められる場面が多い。
- ・ 自身の技術を途上国に与えるというよりは、その技術をバックグラウンドとして途上国の人と一緒に学んでいくという意識を持っている人が多い。
- ・ 雇用に関して長期の保障がない環境の中で、学び続け、世の中を渡り歩ける強さを持っている人が多い。



タンザニア（鈴木氏）からの報告

2.2. セッション2 日本のユースからの発信および全体討議

(3) YDP Japan Network (開発にかかわるユース団体ネットワーク) からの発信



YDP Japan Network によるファシリテーション (樺沢氏)

今回のセミナーにおけるセッション2は、「自分たちができる国際協力」というテーマで、一般市民にできる国際協力の形を模索するセッションとなりました。

その中で、ユース団体のネットワークである YDP Japan Network から「今、私たちにできること」というテーマで、YDP Japan Network に加盟する4団体の代表者(東京3名、大阪1名)が発表を行いました。

以下に、どのような内容の発表が行われたかを記します。

YDP Japan Network 担当部分ファシリテーター：樺澤俊亮 (YDPJN 事務局)

プレゼン1 発表者：石田彩佳 (アデオジャパン)

プレゼン2 発表者：高田沙織 (世界の若者による対話-RING)

プレゼン3 発表者：篠原三津保 (C-fa)

プレゼン4 発表者：寺尾恭輔 (CLUB GEORDIE) ...大阪会場

発表の概要

この部分については、YDP Japan Network 事務局の樺澤俊亮が説明を実施した。

YDP Japan Network とは『Youth, Development and Peace Japan Network』を正式名称とする「開発と平和」に関するユース団体のネットワークです。ユースの声を集約し社会

に対して発信していくことがこのネットワークの目的の一つに挙げられており、今回のセミナーにおいては「今、私たちにできること」というテーマで、ユースの問題意識やユースが取り組んでいかなければいけないことをプレゼン形式で発表しました。

さまざまなユースの意見を取り込みながら「ユースの声」を形成したいという思いから、プレゼン作成過程においては、様々なユース団体からプレゼン作成過程へ参加してもらい、メーリングリストにおいてディスカッションを実施しました。プレゼン作成過程への参加団体は、アデオジャパン、国際医学生連盟 日本、CLOB GEORDIE、C-fa、ジャパンプラットフォーム学生ネットワーク、日米学生会議、世界の若者による対話～RING、One's 1、の計8団体であり、30名程度がメーリングリストに参加しました。また、全国に広がるYDP Japan Networkを生かし、北海道や大分からもユースの声を届けることができました。

今回のセミナーにおけるプレゼンは4部構成になっており、そのうち東京の3名(3団体)が担当した部分は、問題意識のターゲットのレベルに対応する形で分かれている。具体的には、

- ・ 途上国開発に関わっているユースに対する「現場イメージ獲得の機会創出」
- ・ 開発に取り組む人材拡大のための「インセンティブの付与」
- ・ 開発についての啓発対象となる層へ向けた「開発教育の充実」

というテーマのもと「今、わたしたちにできること」という切り口でプレゼンをした。

また、東京会場での3つの発表での「わたしたち」というものは、主に「ユース団体」という主体を示していましたが、大阪会場の発表は「個人としてのわたしたち」が途上国開発に関してできることを提案するという形をとりました。

プレゼン1 開発の現場との距離を縮めるために

発表者：石田彩佳（アデオジャパン）

今回の開発セミナー実施の目的と同じく、途上国開発の現場というのはどこか遠くの世界のここのように思えてしまう、という問題意識はユースの中でもありました。公的機関やNGOが実際にどのようなプロジェクトを展開しているのか、このようなイメージを獲得させることは、ある程度途上国開発に興味がある層に特に必要だと思われます。ユースというのは将来の途上国開発の担い手であり、途上国開発に携わる職業に就く上で、現場の活動をイメージできるようになることは、その個人にとっても社会にとっても非常に重要なことだと思われます。そして、そのために必要なツールが社会には十分に整っていないと考えられます。たとえば、途上国での海外インターンシップは、数多く受け入れ機関があるわけでもなく、多くの場合は数ヶ月にわたるもので休学が必要になる学生にとってはなじみの薄いものとなっています。

そのような意味で、今回のような途上国の現場と日本をつなぐセミナーの類は今後も継続して取り組んでいく必要があります。また、途上国との交換留学制度や短期インターンシップを整えていくことも必要です。さらに、大学と開発の現場が連携することによって、大学内で現場を志向した教育を受けることを可能にする必要があると考えます。

そして、「今、わたしたちができること」としてユースが取り組むべきなのは、ユース同士、あるいはユースと社会の間で現場を志向したネットワークを構築していくことです。途上国開発の現場経験をつんだ数少ないユースがその経験を他のユースと共有していくような試み（活動報告会など）や開発の現場へのスタディーツアーなどを企画していく必要があると思われます。

途上国開発の現場をイメージできるようにするため、社会にこのような基盤が整い、ユースが取り組んでいけば、将来の開発を担う日本のユースのキャパシティビルディングにつな

がるのです。



アデオジャパンによるプレゼンテーション（石田氏）

プレゼン2 開発問題に取り組む人材を増やすために

発表者：高田沙織（世界の若者による対話～RING）

今回のプレゼンを作成するにあたり、ユースが抱える問題意識とは何か、ということを議論の中で考えました。その中で最も多く挙がったのが、「途上国開発に関心を持っていたとしても、実際になんらかの行動に移す人は少ない」という意見でした。たとえば、大学で途上国開発について勉強しても就職先がない、また、就職しない形で途上国開発に取り組むと生活との両立が図れないという現状があります。それとは違うレベルでは、啓発活動などは盛んであり、関心を持ってくれる人間がたくさんいるとしても、その関心の持続性はその人自身のモチベーションのみに依存しているので継続が難しい、ということが挙げられます。

途上国開発に関心を持っている人たちをどうやらもう一歩先のレベルの「活動」に取り込むために必要なのは、「途上国開発に関わる活動をするに対してインセンティブをしっかりと与える」ことだと考えます。特に、人生の中で「ユース」という時期は社会に出る前の過渡期にあたり、将来を決めるために思い悩む時期になります。この時期に、「途上国開発」という分野を選択肢の一つとして考えられるようになるかどうかは、戦略的に非常に重要な位置を占めますし、社会に出る前の比較的自由な時間のうちに、なんらかのアクションを取っておくことはたとえ途上国開発に関わらない仕事についていたとしても途上国開発への関心が高い社会人を養成することにつながります。

市場セクターと開発分野のセクターがあると想定すると、市場セクターに興味を持った場合（将来の選択肢として企業への就職を考えるなどの場合）、学生の間に取り組むような活動としてインターンシップやアルバイトが挙げられます。そして、そのような活動にはキャリアアップやスキルアップなどのインセンティブが存在する他、金銭的なインセンティブが存在します。一方、途上国開発に興味を持った人間が活動するための受け皿は、NGOでのボランティアか学生団体での活動、さらに学校での研究などです。これらの活動へのインセンティブはボランティア精神や知的好奇心といった、本来の意味でインセンティブといえるものではありません。社会の中で「実利」と結びついたインセンティブを提供するような仕組みを整える必要がある、と私たちは考えます。具体的には、NGOでの活動がボランティア活動

に留まらず、インターンシップと呼べる「キャリアアップのための場」として確立すること。Award や奨励金、単位認定制度などユースの社会の中で実利に基づいた仕組みを整えること。そして、途上国開発の問題意識に基づいた社会企業家を排出できるような基盤を整えること、などが挙げられます。

そして、社会に求めるだけでなくユースとして取り組んでいくべきことは「途上国開発について活動をしているユース団体がスキルアップの場として確立すること」だと考えます。ユース団体には、「社会貢献の主体」としての側面と「サークル的存在」の側面のほか、「将来に役立つスキルを身につける場」としての側面が備わっていると考えられます。しかし、社会的に見ても外部の大学生から見ても、ユース団体に活動することが将来のキャリアにつながるようなスキルを身につけられる場所であるということが認識されているわけではありませんし、実際ユース団体の多くはそのスキルアップの場としての条件を十分に備えていないのが実情です。社会からの認識を変えること、そして実際にスキルアップとしての場として整備されることにより、サークル活動などのオルターナティブとしてユース団体の地位を高める必要があると考えます。そうして多くの人材をユース団体に取り込み、途上国開発に関心の高い人間を育成していくことを可能に出来ればと思います。



世界の若者による対話～RING によるプレゼンテーション（高田氏）

プレゼン3 より良い開発教育のために

発表者：篠原三津保（C-fa）

上記二つのプレゼンは、途上国開発についてすでに関心のある層が対象となるものでしたが、まったく関心がない層に対するアプローチというものも、プレゼン作成の段階で大いに議論されました。無関心層に対するアプローチとしてはホワイトバンドのキャンペーンなどが有名ですが、ここで取り上げたいのは特に子供たちに対する開発教育の問題です。柔軟な思考のできる若いうちから途上国開発の分野への興味を養っておくことは社会的に重要なことだと考えられます。

開発教育というものをとりあげた背景には、ユースによる開発教育には非常に積極的な意義があるという考えがあります。第一に、近い世代による教育の効果です。教える・教わる関係だけでなく、一緒に考えていく姿勢で学んでいくことは、正解のわからない途上国開発に関する教育においては非常に高い効果を上げられると考えられます。第二に、開発と教育の間で、バランスの取れた位置にいる、ということです。学校の教師は途上国開発の問題に関して近い位置にいるとは言えず、また途上国開発に携わっている人たちも公教育の現場に近いところにいるとはいえません。その間の橋渡し役を担うことができるのではないかと考えています。

そんな中、社会の中で必要なこととしてユースが考えていることは以下のようなものになります。第一に途上国の人々との共存を身近なものとして考えられる機会が公教育の中にないことです。もっと途上国の人々の生の声を届けられるような授業が必要ですし、途上国開発という分野の性格を鑑みると、子供たちの主体性を引き出すような参加型の授業が必要になってくると思います。第二に、開発教育に関するツールが散在していることが挙げられます。開発教育に取り組む人々は各地にいるものの、情報やノウハウ・ツールなどを独自に保有しているのみで、その共有がはかられておりません。開発教育を実施している人間同士のネットワークを構築することによりそのノウハウ・ツールの共有を進め、開発の現場と教育現場とのネットワークを構築することにより開発現場に関する質の高い情報を共有できるようにする必要があります。

そして、今ユースができることとして、このネットワークの構築があげられると考えます。ユースと教育者、途上国開発の分野の人間の間で情報共有を進めていき、その一方で、ユースによる草の根の開発教育活動、教育カリキュラムへの提言、そして開発教育を担える人材の育成に取り組んで行きたいと考えます。



C-fa によるプレゼンテーション（篠原氏）

プレゼン4 個人としてできること

発表者：寺尾恭輔（CLUB GEORDIE）
大阪会場での発表

ここまでの東京会場の発表では、「今わたしたちにできること」の「私たち」が意味するものは「ユース団体」と同義でありました。ここでの発表は、会場の皆さんが個人として取り組めることを提案していく形になっています。

今回発するメッセージは非常に単純かつ明快な以下の3つです。

- ・小さなことからコツコツと！
- ・ミーハーになりませんか？！
- ・自分にあった国際協ラストाइルで！

まず、一つ目の「小さなことからコツコツと！」ですが、一般の人にとって途上国開発の問題といったものは、どうしてもテーマの大きいものに見えてしまい、まったく手が出せない、あるいは社会的にインパクトのあることを追い求めがちになってしまう傾向があります。そうではなく、まずできることからコツコツやっていくことが重要なのではないかと考えま

す。特に、友人などと話すときに途上国開発の問題について話題に挙げることなど、身近な人に伝えていくことが非常に大事だと考えます。

第二の「ミーハーになりませんか?！」というメッセージは、流行のものは無関心な人たちのくいつきがいいという背景から、途上国開発に関する流行のようなもの（たとえばホワイトバンドなど）があった場合にはそれに乗っかっていくことも大事だ、ということです。そのようなことを通じて、日本の社会と途上国開発の架け橋となっていくことが必要だと考えます。

第三のメッセージは「自分にあった国際協力スタイルで!」です。国際協力、というと何か難しいものというイメージで見ている人が多いと思いますが、日本にはいろいろな形で国際協力に取り組んでいる人がいると思います。きっと自分にあった国際協力の形が見つかると思います。そして、それを見つけた際には、身近な人の国際協力の形を探してあげる国際協力のコンサルタントなることが必要だと考えます。



CLUB GEORDIE によるプレゼンテーション（寺尾氏）

（４）会議参加者と現地 ODA タスクフォースとの討議

自分の生活・意識を変えていくべき

[参加者からの意見]

- ・ シャワーをこまめに止める、ごみの分別など小さなことから取り組みたい。（東京会場・学生）
- ・ 選挙権を持つユースは積極的に政治に参加するとよい。（東京会場・学生）

[ODA タスクフォース]

- ・ 地球全体の動き（環境・平和・エネルギーなど）からみても、日本だけで成り立っているものはなく、地球全体がどうなっているか関心もつことが大切。日本でできることを皆さんと一緒に考えることは、現場にいる自分にとっても励みになる。（バングラデシュ・JICA）
- ・ 途上国は、日本と違って人との距離が近く、人との係わり合いがないと生活ができないため、おのずと相手の立場になって考えるようになる。自分の生活習慣、ものの考え方を変えるいいきっかけとなった。（タンザニア・JICA）
- ・ 自分個人として何かをすることも大切だが、普段から自分の意識を高めるいろんな情報に接して関心を持つことも大切。（タンザニア・UNDP）

まずは現地へ行きたい

[参加者からの意見]

- ・ YDP JPN の寺尾さんの発表を聞き、自分の無知、無関心でいることを恥ずかしく思った。国際協力や開発問題は遠くを見がちだが、自分の足元を見ることが重要であることに気づいた。まずは自分の夢であるバングラデシュへ行く！（大阪会場・学生）

[ODA タスクフォース]

- ・ 自分は青年海外協力隊（JOCV）で村落開発普及員としてバングラデシュにいる。開発に関心があり、NGO のインターンを経て、JOCV の中でも専門性を問わない村落開発普及員を受けて今に至る。早く現場に行きたい！という気持ちであったため JOCV を受けたが、身近なところにあるいろんな形の国際協力があるので、自分の思うような形でかかわって欲しい。（バングラデシュ・JOCV）



会議参加者と現地 ODA タスクフォースとの討議

メディアを活用して情報提供してもらいたい

[参加者からの意見]

- ・ アメリカの TV では、一日中途上国支援のための寄附金募集を流している番組がある。日本でも同じようなものがあれば、もっと人々の関心が高まるのではないか。（東京会場・学生）

[ODA タスクフォース]

- ・ JICA では市民との距離を近くするために、JOCV 経験者の生の体験を伝える機会を設けているので、参加してみてもどうか。（タンザニア・JICA）
- ・ 広報室での業務を通じ、日本の著名人の発言力の大きさや、どの有名人が国際協力に関心を持っているのかを知ることができた。互いに情報をつなげられれば、もっと情報発信できると思う。（タンザニア・JICA）

フェアトレードを推進していくべき

[参加者からの意見]

- ・ 現在ドライマンゴーのフェアトレードに取り組んでいる。「モノを買う」という行為は日

常の身近なことであり、取り組みやすい。モノを通してその国のことを考えるよいきっかけとなる（大阪会場・学生）

- ・ 現地の人たちが頑張った分だけ儲かる仕組みづくりをするため、フェアトレード会社を営んでいる。「かわいそうだから」ではなく「かっこいいから」、と消費者に選ばれる商品にしたい。これが自分なりの国際協力のスタイル（東京会場・会社員）

[ODA タスクフォース]

- ・ フェアトレード商品は、どのような人たちによってどのように作られたのか考え、学びながら、楽しみながら使うことが、国際協力につながる（バングラデシュ・シャプラニール）

最後に

[参加者からの意見]

- ・ 国際協力や途上国問題は自分とはかかわりのない問題だと思っていた。しかし、セミナーを通して、豊かな社会で生活している自分たちの無知が、途上国の人々の生活に悪影響を及ぼしていて、その事実を認識すること、情報を広げることの重要性が分かった。まずは現地へ行ってみることは意識を変えるために重要ではないかと思った。

まとめ

[ODA タスクフォース]

- ・ タンザニアのユースグループでは、薬物や売春経験者が JOCV が行う青少年活動の一環で更正し、職業訓練を受けるだけでなく、他のユースへの啓発活動を実施している。ユースはこれからの社会の中核を担っていく人材。情報が多すぎて身動きがとれなくなりがちであるが、一歩踏み出し、行動することが大切。（タンザニア・JICA）
- ・ われわれも途上国で生まれたかもしれない。自分だけ豊かでよいのか？幸せとは、可能性とは何か？一人の日本人としてできることから始めることが大切。自分の良さを発見し、世界のために、自分なりの方法でそれを生かしてもらえることが、現地で働くわれわれの本望です。（バングラデシュ・大使館）



参加者からのコメント（東京会場）



参加者からのコメント（大阪会場）



聞き入る参加者

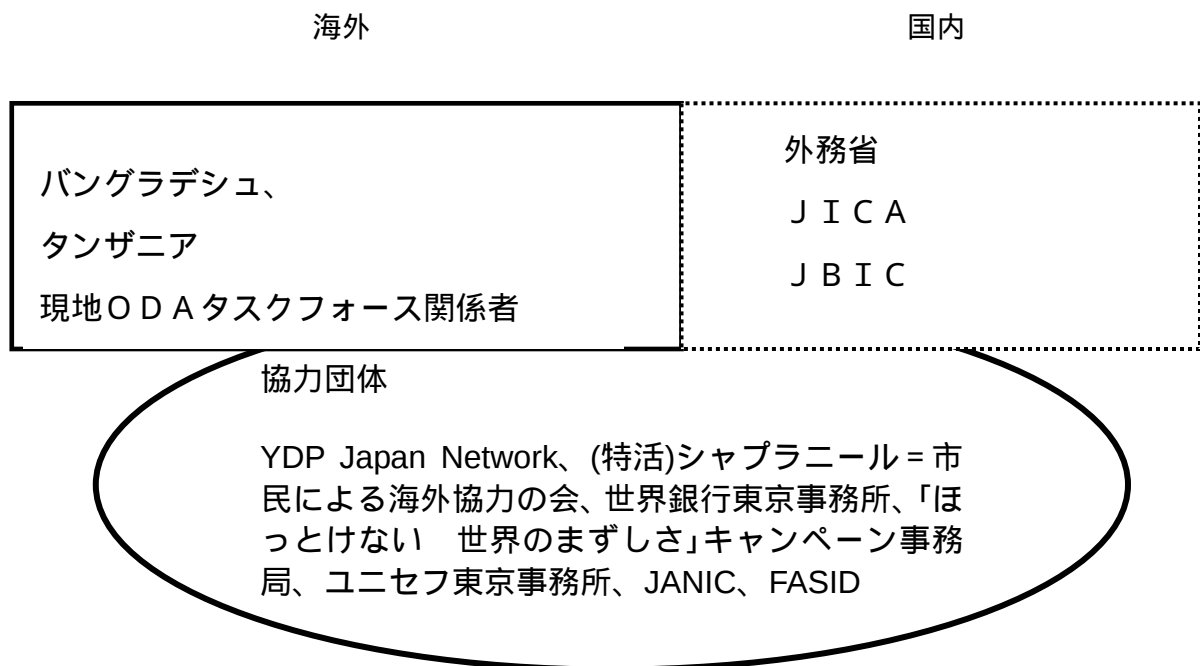
3. 実施体制

バングラデシュ及びタンザニアでの、外務省、JICA、JBICの現地関係者を中心とした「現地ODAタスクフォース」が、各国の現場で活動する本邦NGOや国際機関に勤務する日本人関係者の参加をえつつ、セミナー実施を企画した。

同企画に対し、国内のODA実施機関（外務省、JICA、JBIC）の政策・広報担当部署や地域担当部署及び、複数の協力団体（開発に関するユース団体、在京国際機関及びNGO等）が実施に参加した。

協力団体は主に広報及び東京会場での相談コーナー開設（参加者への説明対応）を中心に参加したが、開発に関するユース団体である YDP Japan Network はプログラム中セッション2にて発表をおこなった。

実施にかかる全般的な業務調整は JICA 国内事業市民参加協力室が社会開発部 JICA-Net チームや国際協力総合研修所等各会場関係部署と共に実施した。



続々と会場へ（東京）



メッセージが伝わるかな？
ほっとけない世界のまずしさキャンペーン
ブースで



熱心に情報収集



相談コーナーの様子（JICA）



相談コーナーの様子（YDP Japan Network）



相談コーナーの様子（外務省）



相談コーナーの様子（JBIC）

4. 資料

4.1. 提案用紙回収結果

(1) 自分にできること (回答数 99 件)

1	自分の生活の中で少しずつ行動を起こす (意識を変える、フェアトレードに関わる、無駄遣いをなくすなど)	34 件
2	途上国の現場へ飛び込むための行動を起こす	20 件
3	情報収集する、発信する、関連情報を身近にするためにメディアを活用する	14 件
4	その他 (特定分野での活動強化、プログラム促進など)	21 件

(2) 質問・期待していること (回答数 90 件)

1	質問	61 件
2	期待すること	29 件

自分の生活の中で少しずつ行動を起こす (意識を変える、フェアトレードに関わるなど)

	提案内容「私にできること」
1	「動くこと」少しでもいいから、募金でも署名でも力になれることをする。
2	「考えること」自分で想像してどうしたらいいか考える。
3	まず、世界と日本に意識を向けることを心がけたいです。私は大学で教職課程を履修している為、世界の教育関係に興味があります。貧困地域では十分な教育が受けられない子やお金なくて文房具が買えない子たちの為に、私たちが未使用の文房具を集めてプレゼントするなどの活動をし、学習が出来ること、未来を担う子どもたちに勉強をさせてあげたいと思います。
4	フェアトレードの利用、促進 (広めていく)
5	具体的に行われている Action plan を知ることで、こういうことが必要とされているモノ、計画だと考えられるようになります。まずは、その発想がわたしの第一歩かなと思います。
6	自分が現地で得た情報を友人に伝える。
7	日々の生活の中でムダをしない。水、木材等の資源はもちろんのこと、ものを大切にすることを。飲食店やスーパー、コンビニ等の廃棄物、どうにか減らせるようにしたい。
8	途上国について、知らないことがありすぎる。まず、自分自身が知ること、考えること。そして周りの人に伝えること。
9	水道や病気改善の話などは、専門的な知識がないと、と思いましたが、もっと身近にできることを考えて、物資支援などから、自発的に少しでもやっていきたいと思っています。私は、教育に興味があるのでその関係の本を読んだりして知識を増やしたい。
10	負の遺産を残さないように子孫のことを (自分の子供) 考えて行動したいです。
11	身近にできることから少しでも取り組んでいきたい。例えば、NGO などへの寄付、情報発信、無駄な消費を抑える等。
12	まずは今の途上国の現状を学んでいくことが大切だと思う。日本での生活が当たり前だと思わず、もっと世界に目を向ける。あと、自分の身の回りからできることの中で友達が割り箸を使わない、といっていました。身近なことでもできることはあるんだな、と思います。
13	現状についてもっと知ること、人に伝え、興味をもってもらうこと。日本にいながらできることをする。ボランティアに参加したり、フェアトレード支援、自分で NGO をおこすなど。ベトナムへ旅行した際にその交通状態のひどさに驚いた。もっと安全な市づくりを目指し、ODA 支援して欲しい。

14	お金の支援（寄付）だけでなく、途上国の人たちの心を動かすことをしていきたいです。しかし、どうやったらできるのか。国レベルでないとできないのか。個人でできることは何か。私が今までしてきたことは、JICEの海外から来た青年を都内の案内をするボランティアでした。コトバはほとんど通じませんでしたが、相手の目を見て身振り手振りでもいいから伝えたいことを伝えました。私がこれからできることは、ボランティアに参加し、青年たちともっと話せるように事前にその国のことを調べる。そしてそこで知ったこと、ボランティアでの経験を
15	途上国での経験など他の者に伝え、情報を伝えると共に関心をわかせること。お金どうこうの前に現場を知ることが必要なので、効果的にアドバイズすることと、知ること。
16	現地の人々と話し合っって本当にその人達のニーズに合ったプロジェクトを考え、実行する。現地の人々とともに行うプロジェクトをする。
17	同年代同士での交流（途上国と先進国の）。
18	ワンデイボランティアは身近に参加できるものの一つだと思います。昨年も参加しましたが、今年もやるつもりです。
19	日本でもできる海外協力、自分のあいている時間を利用してできることを、小さいことからでも見つけて取り組んでいくこと。もっと途上国の人たちの現状を学ぶこと。
20	まず、新聞やTVなどで途上国の現状を知り、問題意識を持つ。国内で行われているボランティアに参加する。募金をする。
21	私達の意識を変えることで日本を変えること。自分の行動が（例えば消費行動が）何を及ぼすのか、自覚を持つこと。身近なものから世界とのつながりを考えていくこと。あらゆるものが相互に関連しあった（例えば気候や人間だけではない生態系など、地球環境システム、経済システム）世界に住む一人である以上は。
22	より多くの日本人に支援活動に参加してもらえるように意識を高める活動をする。
23	日本人の途上国への問題意識やボランティア意識の向上に何が必要か考えてみたいです。
24	“think globally, act locally” 常に意識して生活すること、自分の周りに発信すること、小さなことから具体的に行動すること。身の回りのもの、食料品や生活用品、衣料品などを通して日本と「途上国」のつながり、関係について考える。家族や友人、知り合いなどと日本や「途上国」を含む世界のことについて話題にする。ボランティアサークルに参加する。フェアトレード商品を購入してみる。NGOなどが募集するサポーターになる。etc・・・。
25	現在、フェアトレード活動をしています。自分たちの店舗や大学生協、一般商店、各種団体を通じて、フェアトレードについて知ってもらおうと共に、世界の状況を伝えていくことが大切だと思っています。身近なところから改善できる1つの手段だと思っています。
26	上記店舗において、地域で国際協力をしている拠点として根付いていきたいです。地域に開かれた国際協力の拠点づくり。
27	先進国の私たちが自分の生活を見直すことは、世界に与えるインパクトは大きいのではないのでしょうか。
28	無理せず手が届く範囲でできることをします。
29	今の私の状況では「活動」までは難しいので、このようなセミナーで知ったことをまわりの人に伝え、そこからまた広がって……。国際協力について、事実を知ってもらったり興味を持ってもらうこと、でしょうか。
30	小学校教諭の知り合いが多いので、教育の中で取り上げてほしいなと思っています。ただ「総合」で何をとりあげるかは「学校」としての判断らしく、自分がしたいから「国際理解」とは単純にはいきなり難しいです。
31	その途上国や自分の興味のある分野について調べる、知ろうとする。今日のようなセミナーに積極的に参加する。
32	私自身の周囲に途上国への理解を深めていきたい。そのために私も途上国についてもっともっと知識を得、私たちの未来を築きあげてゆきたい。まずは、色々な国の現状を知ること。現場にゆきたい。あと、私自身を人と相互に協力しあう者として高めてゆきたい。

33	私は新聞や簡単なハンドアウトを作成し、配布するなど不特定多数の方に（今まで興味のなかった方たちに）問題意識を持ってもらえるような活動をしてみたいと考えています。
34	世界にもっと目を向ける。日常の意識に途上国問題を取り入れる。公正貿易で売られている商品を買う。今回の開発セミナーのようなもの等に参加する（積極的に）。

途上国の現場へ飛び込むための行動を起こす

	提案内容「私にできること」
35	現地へ。人を育てる！
36	（途上国の）現地に行ったことがないので、とりあえず現地に行き、現状を自分の目で把握したい。そのことも含め学生である今、できることは現状をよく知ることだと思う。何が必要かが分かれば自ずと自分に何ができるかわかるように思います。
37	途上国の人々の生活向上に関することをしたい。現場で働きたい。
38	現地に図書館をつくってほしい！！ので、本を集める。
39	マラリアの予防薬。ストリートチルドレン。話を聞いてだけでなく（ピンとこない）、短期間でも一度出してみる。百聞は一見にしかず。本や新聞、英語をしっかりとやり、情報収集もして、しっかりと学ぶ。臨床検査技師講座をとる。
40	まだ学生なので途上国や貧困に目を向けている NGO などの団体にボランティアとして出入りし、ボランティア同士で今のうちからつながりを作っていく。職員や会員の方とは違い、無所属の立場だからこそ団体等の下で広くつながりを持てると思う。そこから各団体が協働するまでに発展したら、今まで以上に大きなプロジェクトも起こせるはず。
41	私も国際協力組織に参加して、現場で活動してみたいと思いました。できれば一番大切な「意識をかわること」という取りくみに挑戦してみたいです。
42	現在、環境コーディネイトの仕事をしています。日本国内、東京で培ったノウハウをいろいろな意味での途上国へ移転し、現地の人達の手で下線やゴミの問題の解決のために協力したいと考えています。
43	自分自身で実際に開発途上国に行き、貧しい子どもたちに教育を行いたい。日本ではあたり前に行われている社会的常識やモラル、性教育など教えられることは多々あると思う。
44	自分自身も現場に行き、現地の人、子どもの目で現状を見たい。自分にできることは、正直わからない・・・でも、まずはボランティアしたいです。
45	支援をする上で、「現地を知る」「人々を知る」ということは非常に大事だと思いました。本だけでなく、現地にも、ぜひ行ってみたいと思いました。また1円でも2円でも自分のできる範囲で募金等協力したいと思います。
46	JICA, JBIC 等に就職し、援助プログラムに現地で実際に携わってみたいと思います。私は文系のため技術的な面よりも事務的な面で役割を果たしていきたいです。
47	現地での改善プログラムの作成、提案、プログラム管理などを行ってみたい。特に医療系の知識はないが、AIDS やマラリアなどの置く滅のための活動をしてみたい。
48	現地の人と交流し実態を知る。人と人とのつながり合いで、生活の意識レベルが変化し、私が学べることもあるだろうし、相手が私から学べる事もあるはずである。実際に私もタイ出身の女性と生活を共にすることで色々気づき「変えてみよう、ここが改善できるかも。」と自分の環境を見直すことができた。世界中のつながりが世界中を良い平和なものに変えるきっかけになるはずだ！
49	ゼミのみんなで途上国に行き、Street Children の子供たちと対話して、平和な世界の第一歩を築きたい。
50	町を歩き、人々から聞き取ったニーズを吸い上げるということは、とても大切なことと感じました。こういうことを将来的にしてゆくことで、一緒に未来を創りたい。今はもっと現状を知ること、実際に見ること、NGO に参加して「自分はどのような切り口で協力してゆけるか」を探してゆこう、そこから始めよう、と思いました。

51	途上国に行ってみる！
52	自分の会社を大きくする。
53	日本でできることは資金援助が大きいと思います。（バイト代を寄付するなど）又、NGO に自身で加入し、友人や周囲の人々にその情報を伝え広めることも、大切であると考えました。
54	やっぱり途上国の人たちと触れ合う機会をもつこと、そして日常生活の中でフェアトレード商品などを利用すること、とにかく世界の現状を“知る”ということをししたいと思います。
55	その時その環境でその人たちと共に生きたい。その中で自分にできることを共有したい。
56	実際に現地に行ったことがないので、かねてから計画していた現地への訪問をすることが第一歩だと思う。
57	スタディツアー（学校や医療の現場で）。市民交流（相手国の市民グループと日本の市民グループとの交流）。
58	私個人としては将来、国際 NGO でボランティア要員の教育を受けた後、アフリカにて、ある一定期間活動したいと思います。その後は、普段の何気ない日常生活風景で、少しでもグローバルな意識を 1 秒でもいいから人々が毎日思いをはせるような仕組みができないものかと思います。例えば、スーパーの価格表示の中に途上国ではこの価格はどのくらいのお金に匹敵するのかを表示したり、日本ではゴミでも他国では違うという説明がゴミ置き場にあったり、そういう価値転換を働きかけることについて、民意の意識を高くすることができないか考えていきたいです。又、今後は私のマンションを留学生に安く提供することも考えています。
59	まず、現地（途上国）に 1 度は行ってみる。資料や映像でもその現状は把握できるが、肌身にせまる感覚がない。なんとかして実際に途上国の空気を吸ってみれば、自分の意識が格段に変わると思う。ボランティアなどに関わる際の意識も全く違ったものになると思う。
60	私は今、就職活動中で、インフラ整備によって途上国の経済を安定化し、それにより経済がうるおっていくような仕組みを作り、経済格差をなくしていくというようなことに興味があるので、JBIC を目指しています。まだ、どうなるか分かりませんが、できることはたくさんある気がします。途上国のことを友達に伝えたり、話し合うこともとても有意義だと思うし、募金することでも、途上国の人たちを支える基盤になると思います。ただ、彼らの将来に持続的なものとなるような取り組みがしてみたいです。
61	実際に日本での活動が現地で役立っていると実感できるような事をしたい。そうすれば日本にいても本当に役に立っているんだと実感でき、続けていこうとモチベーションが上がったりすると思います。
62	まだ私に何ができるのかよく分からないんですけど、私も開発途上国に行って活動できればと思います。とりあえず、今は今できることをしたいです。募金とか、古着を送ったりとかしか思い浮かびませんが、1 週間後にタイのスタディツアーに行くので何か学んで帰ってこれたらと思います。
63	来月からケニアへ行きます。JOCV として・・・。
64	国際公務員になって、自分の興味のある分野で解決に向けて行く。

情報収集する、発信する、関連情報を身近にするためにメディアを活用する

	提案内容「私にできること」
65	「知ること」様々な問題について「知らない」ではすまないの、常にアンテナをはり情報を集める。
66	もっと国際協力活動や現地の状況を広く国民に伝え、参加しやすい協力体制を築くこと。TV やネットなどのメディアで、どうしても取り上げないのか疑問に思います。私自身、現地に行って働くことに対して少し恐い思いもあるのですが、それは情報の少なさから感じられる事です。今、現地におられる方々は、そのような点で重要な役割を果たしており、今後も、将来の誰かのために今、現地に行く人が必要なのだと感じました。
67	途上国にいけない人でも、より途上国のことを感じられるような現地の人々との相互理解の機会を設ける。手紙やメール TV 電話など、様々な手段が使えらると思います。

68	私は学生なので、自分を役立てられるためにもあと数年間勉強（予防医学など）を頑張りたいと思いました。学生中には長期の休みがあるので、それを利用して途上国へ行き、学び、援助したい、とも思います。
69	状況を知る。現地の人の声を聞く。今の自分にできるのは、高校生なので、とにかく「知る」ことであると思う。
70	もっと勉強！！途上国の現状や問題をもっとよく知る。
71	知ること。今日、セミナーを受けてみて、知らないことがいっぱいあった。まずは今の途上国の現状とどのような国際協力がなされているのかを色々な手段（現地に行ってみる、インターネット、本）を使ってたくさん知らなければならないと思った。知らなきゃ、私にできることなんてわからない！！と思った。
72	雑誌やTVなどによる情報収集。スタディツアーなどに参加し、現場を知る。NGO、NPOなどからの情報収集。
73	大学や援助関連の職業に就き学び、身に着けたことを理念・モラル的な時点とどまらず、勇気を出して、実践・経験してゆきたい。熱意+実行が大切なのだと、今回見直すことができたと思います。
74	興味のある分野の本をよみまくる。英語力をあげる。自分の目指すところに到達するために必要な力を知る。ステップをふんで目標達成。実際に研修に参加する。
75	今までは現地で local の人々に何ができるかという点ばかりに関心が向いていましたが、それを実現する為に、日本の人にいかにその活動を知ってもらい、協力を得るかという点の重要性を感じました。
76	JICA で働きたいです。ボランティアではなく、仕事としてできる機関は他にどこがありますか？
77	現在、勉強中の NGO 関係者です。農村コミュニティを強くするような支援に携われたらよいなと思っております。特にマイクロファイナンス、インシュアランスなどに興味をもっています。
78	・まずは自分自身が世界の現状（政治や戦争、紛争、災害、貧困など）について勉強し続けていくこと。

その他（特定分野での活動強化、プログラム促進など）

	提案内容「私にできること」
79	教育。特にストリートチルドレンが少しでも教育（よみかき）を受けられるようにすること。
80	資金援助だけではない支援が必要だと思います。「ともに」創るためには、草の根レベルから相手国のニーズに合った援助が大切なのではないでしょうか。私は途上国の子どもたちの保健や教育の面を援助していきたいと考えます。子どもたちが生き生きとしていることがその国の力にもつながると考えるからです。
81	現地の生活水準を上げるには「教育」が必要だと思った。モラルやライフスキルの向上、そのための環境づくりをするのが重要。もしこちらから物資を送っただけではどうやって使っても分からないと思う。だから現地での「教育」に力を入れるのがまず重要だと思います。
82	将来を担う子どもへの教育・モラルをうえつけることが大事だと思います。
83	子どもたちが教育を受けられるように、働き手として取られることがないように大人への協力も必要。←労働力が適切に割り当てていけるように、現地をサポートして下さい。
84	途上国だけでなく、世界中の人々が正しいモラルを持つことで、地球規模での協力に繋がるのではないのでしょうか？
85	モラルがあれば、ゴミのポイ捨てもなく、清掃活動自体する必要もなくなります。
86	ジェンダーアプローチに関心があり、男女のあり方について日本の経験も踏まえて考えたい。是非、途上国の女性が活躍してくれるよう、日本と途上国の間に“女性の会”のようなつながりが持てたらと思う。
87	先進国の問題を繰り返すことなく、途上国へ伝承し、効率よく発展していけたらいいと思います。
88	金銭的なモチベーションが高まるようなプログラム/プロジェクトを作り上げる事により、途上国/先進国（日本）からの積極的な参加を促す。

89	貧困国といわれる国の多くが、現在、直面している問題に対し、解決のノウハウというものを全くと言っていい程に知らない現状を知った。日本が発展してきた歴史の中で起きた、公害などは発展途上国で将来、実際に起こりうる問題なんだと感じた。発展途上国の将来的な安定した開発を進めるためにはまず、今まで日本で起きてきた問題をより深く理解し、現地でそれを起こさないための政策立案できる力が必要だと思う。
90	途上国の子供たちの保護やサポートをするだけでなく、働く喜びを教える必要があると思います。労働することは重要なこと、と思います。仕事を作ることは重要と思う。
91	世界中から貧困をなくしたい。母子保健の体制を整える。乳幼児死亡率の低下を目標とする。
92	議会職員という立場から、国際貢献を考えています。今後、途上国議会の民主化支援などを視野に入れ、活動を進めることができると考えております。
93	政府による途上国支援の取り組みに対して、理解し、賛同する姿勢、政治参画を進める（＝政治への関心を強める）特に若年層。
94	「開発学」というディスプリンをなくすこと。
95	自分の会社（フェアトレードに関わる業務）を大きくする。www.mother-house.jp
96	両国共に貧しい国で底辺の子供たちの教育率とそのレベルを知りたい。又、日本の文化や世界の歴史が十分認識されているか、自分たちの国の歴史や文化も十分学んでいるか、異文化交流が大切である。この国の人たちが経済、政治等の世界の仕組みと民主主義平和の意義を幅広く理解させる活動、経済支援が大切なことは分かるが日本の援助はもっとこの国の人たちの心の・・・（続く）。
97	一人でいきなり国際協力といった、大それたものはできないと思いますが・・・（続く）。
98	植林を通じた環境整備を中心にコミュニティ・ディベロップメント、特に住民参加型の地域開発。
99	看護師の計算能力やマラリアに対する知識不足対策に興味があった。現地の看護師たちが問題意識を持っていたのかどうか、現場の看護師たち全体がその問題に取り組む姿勢があるのかどうか気になった。当然ながら先進国からの視点だけでは現地の人々は動く気すら起きないと思うので、問題点提示の段階からプロジェクトの内容企画立案など、現地の人々としっかり話し合っ取り組んでみたいという思いは強い。援助をするのは主体ではなく、バックアップする存在の立場であることが重要だと思う。

質問

	質問
1	国内にいる人ができる現地の方への協力・支援はないのでしょうか？また、専門家として働かれている立場から、国内の学校教育で“協力”の必要性を扱う事に対してどう思われているのでしょうか？私自身は日本においてももっと国際問題を学ぶ機会が増えればよいと思います。とにかく、私自身今後努力していきたいです。
2	政府、NGO、現地住民、それぞれのニーズに対応することは可能なのでしょうか？ジレンマなどがありそうなイメージがあります。もっともっと日本国内に情報発信して下さい！やはり日本人は国際協力に対する意識が低い気がします。
3	今回のプレゼンテーションを通して一番大切、かつ一番皆さんが喜びを感じる所に「現地の人の意識が変わる」ということがあると思います。このために、具体的に何か意識していることはありますか？
4	先ほど、乾季で水不足なので電気が停まってしまう、ということでしたが、何故なのでしょう？
5	現地の人々の意識と日本人の援助をする側の人達とではやはり問題意識などの面においてギャップを感じることがあるのでは、と思いますが、そのような問題にどのように対処しているか教えてほしいと思います。
6	タスクフォースの発言力はどの程度なのか。現地語は必須なのか。

7	実際の現場で働いてて、困難なことはどんなことですか。
8	援助することと依存を生むことの矛盾をどのように回避していくべきでしょうか？
9	持続可能な社会を創るのに必要な援助とはどのようなものだとお考えですか？
10	NGO 職員はギリギリの生活水準で働いていらっしゃるようですが JICA 職員はどうなのでしょう？
11	現地のニーズに合った援助をすることは一番重要なことですが、文化の違いもある中、どのようにそれを実現しているのかお聞かせ下さい。
12	タスクの枠組みの課題だけでは内容がよくわからない。具体的な計画作成、案件の形成について知りたかった。タスクと日本の本省、本部との関係(例えば案件形成の段階で)
13	PRSP もよいが両国のこれまでの実績はどうなっているのか。長い間莫大な金、人、物をつぎこんでいる。
14	財政支援方式の今後の他国への展開はどうか。
15	殺虫剤つき蚊帳→人間に副作用はないのか？
16	BF の意味が分かりづらい
17	JP0 とは？
18	アソシエートエキスパートとは？
19	水道をきれいにすることなどは現地の人々の免疫低下にはつながらないのでしょうか？
20	経済状況が大変な中、いかにして支援を可能にしているのでしょうか？
21	本日ダッカで働く方々の問題は東京の問題と同一で、早く日本も課題解決先進国にならねばとの感があります。海外で問題解決をしようとするとき、日本とどの点が一番異なり、問題となりますか？
22	JBIC, JICA で働いている人に。日本の政府系機関として、日本のために働かなければならないと思いますが、途上国支援においてどこまで支援して、どこからは支援しないという線をどう引くのか教えて下さい。必ずしも win-win の関係を築けるものではないと思うので。
23	JICA の方へ。よくマスコミなどで日本の ODA はうまくいってないとか、現地のニーズを組んでいないなどと批判をうけますが、それはどうしてだと思いますか？
24	治安が悪い地域で自分の身の安全はどのように守っているんですか？
25	今、一番困っていることを教えてください。
26	日本人で現地で働きたがっている若者に対して、仕事の間を多く提供できる環境を作ってほしい。
27	現地で働く上で大変なことは何ですか？後学のため具体的に聞かせていただければ嬉しく思います。また、学生の時はどうなことを考え行動していましたか。よろしくお願いします！
28	現地を理解するため、いつも心がけていることはありますか？
29	「シャプラニールさんが子ども達の心理状況を理解するために日本から 2003 年度心理学者をわざわざ呼んだ」との事ですが、どうして現地の方を呼ばなかったのでしょうか。駐在員の方が 2 名しかいないのであれば、現地人の心理学者さんと呼んだ方がコストも削減できたのではないのでしょうか？
30	日本という国はどう見えますか？
31	民間企業による投資と援助機関による援助のパフォーマンスの差やどちらが先行するのが望ましいかなど両者の関係について知りたいと思います。
32	現地ではどのようなことに困っているのか(現地の人、援助に来ている人の観点で)を明確にして、web サイトなどで情報開示して欲しい。
33	今回、利用されているテレビ会議システムはどのような点で有効性を感じるか？また、システムに足りない部分は何か？他にどのような活動に利用したいか？
34	1 番つらいと思った時はどんな時でしたか？
35	何をやっているのかももっと PR してほしい。
36	とても尊い仕事で、私もとても興味がわきました。しかし、頭がよくないとできないとか、お金がないとできないとかありますか？情熱だけはあります(笑) 皆さん明るくて素敵でした。

37	ODA タスクフォースとして、一丸となって取り組むことは、無駄もなくし、知識が集まるんだろうと感じています。日本のみでなく他の国々との連携などにも興味があります。もしよろしければそれについても具体的な事例があればお聞きしたいです。
38	ネットワークを最大限活用して、“面”で最大の効果を発揮できるような資金の活用、行動をしてほしい。
39	今の私にできることは何ですか？大学３年生の私にできることは何ですか？
40	現地で活動するに当たっては、歴史や文化の深い理解が必要だと思いますが、こういった方法でそれを理解しましたか？
41	自身の夢は何ですか？
42	タンザニアの医者、看護師の数は？
43	どのような経緯で援助活動に携わるようになったのか？ずっと今の仕事を続けていきたいと思っているか。また続けていけると思うか？
44	他国の援助関係者や国際機関との協力関係？
45	途上国や組織の中で働くとき々なしがらみや障害が出てくることがあると思いますが、それらに直面した際はどうされていますか。
46	途上国の貧困は、途上国政府の腐敗あるいは政策の欠如がひとつの大きな要因ではないかと思いますが、実際に途上国で開発の仕事に携わっていて、この問題についてはどのように考えてらっしゃいますか？また、プロジェクトを進める中で、何らかの成果がありましたか？今後の取り組みについても何か考えていらっしゃるがありましたら教えてください。
47	食事はどうしているのか？（現地料理？日本の日常食とかわらない？）
48	教育の制度とシステム
49	今回のセミナーのように、現場から日本の一般の人々へもっともっと情報発信してください！最近 JICA と NGO 間の協力が積極的になってきていると思いますが、開発の問題に興味がある、取り組んでいる民間企業の活力を協力しながら活かす事は可能ですか？
50	・政府機関で働くということは、例えば国の政策や世界政治など、自分の力ではどうしてもできない大きな壁などがあるイメージなのですが、そういったことにはどうやって立ち向かっていかれるのですか？（援助が突然打ち切りになったり、途上国の望む援助が自分の考える援助の方向と違う・・・etc）
51	一般論でいいのですが、海外を転々とする生活と自分の家庭とはどのように両立されているのですか？
52	その国の習慣となっている衛生面やモラルなどは「こうしたほうがいい」ということがあっても外国人としてそれを伝えること、そこから意識を変えていただくのはとてもご苦労があるかと思いますが、「最初の１歩」はどこから始めていかれるのでしょうか？
53	政府組織としての ODA、民間の NGO、現地ではフランクにやりとりされているのでしょうか。日本だと「見えないかべ」があるイメージですが・・・。
54	外務省、JICA、JBIC などの機関の人は別として、民間、NGO の人達は生活費の保障、将来の仕事への保障はどうなっていますか。
55	先ほどお話をされた JBIC の永井進介さんは、どのようなキャリア、経緯で JBIC で働かれることになったんですか？バングラでは森林伐採が進んだせいで、洪水問題が非常に深刻だと、結構古い本に書いてありましたが、現在はどうですか？
56	援助する機会を増やすのはもっともだが、ODA の決算などを事細かに人々に知らせ、人々の関心を高める必要があると思う。そうすれば ODA の予算について協力しようと思う人々もふえるんじゃないでしょうか。
57	家族とともにできる仕事ですか。それとも常に単身で出かけていく仕事になりますか？
58	私はこれまで間接的支援を中心に活動してきました。そこで思ったのですが、私たちユースにできる直接的支援を是非、お聞かせいただきたいと思います。
59	ご報告内容として、一番関心があるのは、そのプロジェクトが結局成果を生んでいるのかどうかです。Plan, Do, See のうち See について詳しく聞きたかったです。

60	日本にいれば国際協力とかをしていますが、実際に現地で役に立っているのかが実感できません。日本にいても実感できることは何かありますか？
61	現地の女性問題についてお話を聞かせてください。

期待すること

	期待すること
1	こういう機会をもっと増やし、広報し、参加者がもっと参加できたらいいと思う。参加型ということです。
2	長い目でみて現地の人たちと共に働くこと。
3	実際に経験している方の個人的体験を聞くのはとても楽しくもあり貴重です。忙しいかと思いますが、こちら側(日本)への発信をして頂いて、我々もできるだけそういうチャンスに触れていきたいと思います。
4	途上国の現状を日本国内へこまめに知らせてほしい。
5	日本の皆さんにももっとこの現状を知ってもらう機会をもった方がよいと思う。
6	ODA の成果、報告をもっと積極的に国民に伝えること。
7	草の根レベルでの活動は現地に赴いてこそできることだと思う。そこで手に入れた情報や、現地のニーズを日本に伝えて下さい。日本にいながらでもできる形でサポートしたいです。
8	日本の人々への情報発信。交流の活性化。キャリアプラン(人生経験)の(無料)シェア。キャリアプランニング支援。@web など
9	与える側ではなく共に働く仲間として皆さんの努力はすばらしいと思いました。
10	頑張ってください。私も将来お手伝いしに行きます。
11	日本の価値観を押し付けるのではなく、まず相手国のあるがままを受け入れてほしい。否定的ではなく好意を持って存在、自分たちと異なるものを認めてほしい。その中で自分の「ある存在」について考えてほしい。自分が今いる場で何ができるのかを。
12	現地での体験をできるだけ多くの人々に知ってもらい、援助への協力を推進して行ってほしい。財源の面でも人材の面でも日本はもっと途上国に貢献すべきだと思うから。
13	現地が本当に必要としていることを把握し実施する。
14	「現場感覚」を大切に。これからも日本と途上国の架け橋になってください！
15	現地の人々の声に耳を傾けて求めているものを最大限に引き出してほしいです。
16	社会的に弱い立場にいて意見の言えない人の思いを常に意識した活動をしてほしいと思います。(もちろん、そのようなことは十分意識してやっておられると思いますが)私は現場で活かされる知識も能力もありません。けれども弱い立場にいる人を見捨てたくない、一緒に何かをしてあげたいという思いはあります。私は日本で自分にできることをさがします。みなさんは、そういう私の思いを現地で実際の活動で発揮してください。
17	もっと現場の人たちの声を聞きたいです。現地の人(バングラデシュ人、タンザニア人)も参加して、「開発セミナー」を開催すればもっと国際的になると思います。
18	先日、出張で世界数十カ国からの参加者と共に研修を受ける機会があったのですが、日本出身の私を見て、アフリカからの参加者が「JICA」と何人も声をかけてきました。現場の知名度は非常に高いようで、また評価もとても高かったです。現地職員の方々のご尽力の賜物だと思いました。ご苦労も多いと存じますが、頑張ってください。
19	自分には現地で実際に働いていらっしゃる方々に何を言う資格もないとは思いますが、それでも一つだけお願いがあります。他人に対して敬意をはらうことです。他人と対等な目線に立つということです。“そんなこと、言われるまでもないよ”という答えが返ってきそうなことは自分にとっても心強いです。
20	JVC の高橋さんが行う政策を推し進めてほしい。
21	タンザニアにこれ以上、お金を投資することは難しいかもしれない。でも、先進国の技術を伝えることはできると思う。タンザニアの気候、資源を活かしてできる産業を開発するのに資金をかけるのも長期的に見て、タンザニアのためになるのではないかなと思う。
22	もっと多くの情報がほしいと思っています。日本にいてできる事、国民一人でもできる事などをアピールしていただきたいと考えます。
23	現地の方が大変誠実に努力されている事が分かりました。

24	現地の人が、利益享受志向→自立志向になるようなベクトルを忘れずに支援していただければ。又、その自立度の成長度合いが現地の人が日々自覚でき、次へのモチベーションにもなるようなしくみが確立され、広がることを希望します。このようなセミナーは大変意義があると思います。
25	ご報告いただく時、専門用語（特に英語）が多いのが気になりました。注釈入れるなど分かりやすい表現が求められているのでは。
26	皆さんのような大変貴重な経験をされている、またはされた人材情報を一括して管理するデータベース等を作って一般市民が彼らに気軽にアクセスできて、お茶のみ感覚でよもやま話しとして聞けるような場ができたと思います。（すみません、これは現地の方ではなく、政策レベルの期待ですね）
27	ODA 予算の削減の中、より効率的な活動が望まれると思いますが、1人でも多くの人々の笑顔や1人でも多くの子供たちの健やかな成長を促進できるように、これからも国際協力への取り組みを頑張っていってほしいと思います。
28	私は去年、タイの農村で研究活動のために滞在していました。カレン族という少数民族の村だったので、タイ人の村よりも金銭的に苦しい状況で彼らは生活し、農業を営んでいました。そこには NGO が作っていたという池が設置されていたのですが、彼らは使い方も全く理解しておらず、使われていない状況でした。その村のまわりは全く電気が通っておらず、夜は真っ暗で何も見えなくなってしまいます。私はその時、ため池よりも外灯の方をつけてほしかったと思いました（勝手に私が思ったんですが）。思ったのですが、現場に行って一緒に生活してはじめて彼らが必要としているものは見えてくる気がするし、今は、援助しているものと彼らが必要としているものがずれている場合があるのではないかという印象をうけることがあるので、是非、現場に根ざした援助を広げていって下さい！
29	結局 ODA タスクフォースも JBIC も「上からの援助」になっていることに自分自身ではどう感じているのか。ボトムアップのプロセスをもっと取り入れ、自己満足でない援助を目指してほしい。

4.2. アンケート結果

「自分にできる国際協力を考える機会となった」と応えた参加者が全体の8割近く（78%）となり、本セミナーの目的はほぼ達成されたといえる(回答数 146 人)。

（１）どのようにしてセミナーの開催をお知りになりましたか

(%)

1	チラシ	2
2	主催協力団体 HP/メールマガジン	70
3	知人の紹介	23
4	その他	4
	回答無	1

（２）印象に残った内容は何ですか（複数回答）

1	現地 ODA タスクフォース概要説明（バングラデシュ・タンザニア）	7
2	ダッカの都市環境を知ろうツアー	20
3	水道公社の経営再建	17
4	ダッカのストリートチルドレン支援活動	22
5	マラリア対策	7
6	援助関係者としてのキャリア形成	6
7	YDP JN からの発信	11
8	全体討議	8
	全て	1
	特になし	1
	回答無	1

（３）「自分にできる国際協力」を考える機会になりましたか

1	はい	78
2	いいえ	3
3	どちらともいえない	12
	回答無	7

（４）セミナー全体の印象

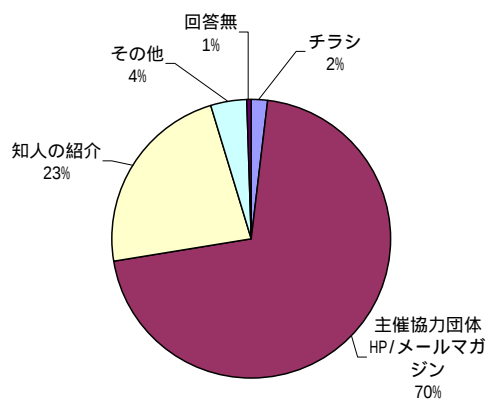
1	満足	39
2	やや満足	40
3	不満足	10
4	どちらともいえない	3
	回答無	8

（５）職業

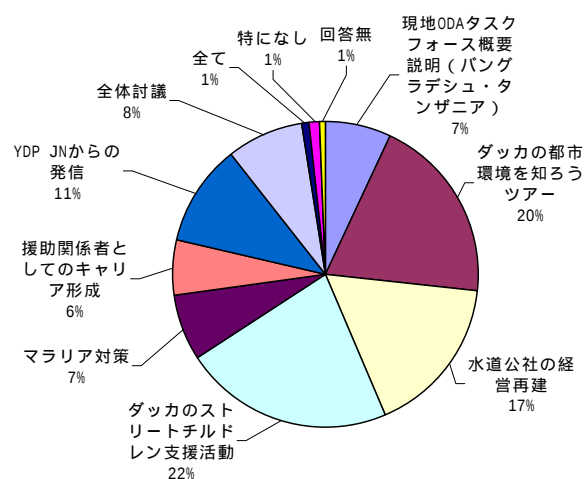
1	学生	64
2	公務員・教員	3
3	民間企業	20
4	自営業	3
5	主婦	1
6	パート・アルバイト	1
7	その他	5
	回答無	3

（６）性別

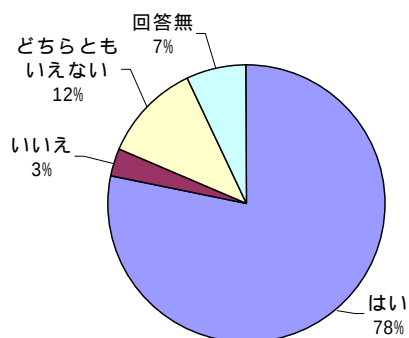
1	男性	34
2	女性	65
	回答無	1



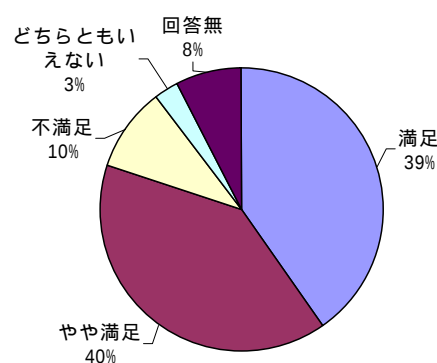
1. どのようにしてセミナーの開催を知りましたか



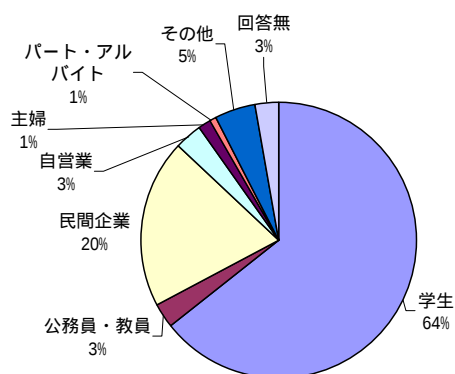
2. 印象に残った内容は何ですか



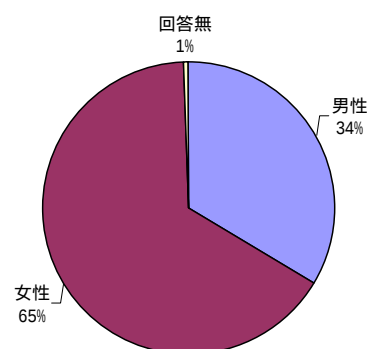
3. 「自分にできる国際協力」を考える機会になりましたか



4. セミナー全体の印象



6. 職業



7. 性別

(7) (2) 印象に残ったプログラムにて該当プログラムを選んだ理由

現地 ODA タスクフォース概要説明 (バングラデシュ・タンザニア)

1	ODA タスクフォースの言葉は耳にしたことがあったけれど、何なのか知り、実際に何をしているのかをストーリーとして聞けた。
2	ODATF というのを始めて知り、質の ODA というものを理解できた。
3	バングラデシュとの一体感が画面の向こうから伝わってきた。
4	タスクフォースを知らなかったので、他勉強になった。様々な機関が支援することは、重複を避けるうえでも大切だと感じた。
5	ODATF という言葉をはじめて知りよい勉強になった。
6	仕事の上で知りたいと思っていたから。
7	ODATF について、そこまで知識がなく、財政のことも良く分からなかった。
8	タスクフォースがどのようなものか詳細を理解できた。

ダッカの都市環境を知ろうツアー

1	現地の行政に大きな意識変革を与えたことはすごいと思いました。
2	パワーポイントが見やすく、内容もまとまっていて分かりやすい
3	映像だったので具体的に分かりやすかった。
4	写真を多用していて、ダッカの環境の現実の様子が良く分かった。
5	とても分かりやすかった。
6	ダッカの年の写真はないより具体的なイメージでした。
7	現地の様子がリアルに分かった。
8	聞きやすかった。ゴミに対する認識と現状にびっくりした。
9	一番分かりやすく聞きやすかった。
10	写真を見せてくれることによって、その国をイメージすることができた。
11	フィリピンの現状とかなり似ていて、とても興味を抱けた。
12	ひとつのプロジェクトを具体的に分かりやすく説明してもらえた。
13	実際の写真もあり、イメージしやすかった。何が問題で、同取り組んでいるのかが、明確でよかった。
14	バングラデシュはどのような国が分からなかったが、ゴミの現状が衝撃的だった。知ることができてよかった。
15	現地の問題の洗い出しや解決策、関係者の役割がとても具体的に分かった。
16	パワーポイントも楽しく作っていて、とっつきやすい内容だった。
17	自分がフィリピンに行ったときにスモークマウンテンの現状を見て感じた問題点に取り組み、政府を動かしてシステム化していった様子に驚きました。途上国に共通する問題なら、このダッカの例を生かして欲しいと思いました。

水道公社の経営再建

1	今まで JBIC に対して持っていたイメージが変わった。インフラ設備の持続性をもった運営は本当に大切だと思ったし、そのための手段を様々な観点から考えていたので。
2	水は大切な公共財。いろいろ資料を読んでいるところだったので。
3	話すテンポが良かったので興味深く聞けた。他のは、台本を読まれているようで、正直言って聞いていて疲れた。
4	国の公の立場の者が水代を支払っていないとは想像がつかない。
5	水道に関しては途上国において常々問題がある。日本人のエンジニアがとても優秀なので一生懸命やっているために途上国で多くの人々が水に関して助かっている (頭の上に乗せて運ぶ女性が沢山いる)。
6	財政再建に関心がある。
7	水問題に明るい未来があると知り驚いた。
8	JBIC がこのような事業をやっているということを始めて知ることができた。
9	JBIC と JICA の連携を感じた。何にしても、現地の人のやる気を引き出すのが大切だと思った。
10	プレゼンをする方の話がおもしろかった。熱意を持った人は面白く話すことができるから、他の人も耳を傾ける。
11	実践的で刺激的だった
12	非常にしっかりした計画立案ができています。
13	特にメッセージがはっきりしていて分かりやすかった。
14	民間企業で働いていたため、自分自身の問題意識、興味関心に一番近かった。
15	内容が良かった。特に役割の部分も。

アンケート結果

16	綿密な計画に基づいた支援が着実に実を結んでいるところがすごいと思った。
17	特に誠意が伝わってきた。
18	普段はあまり見聞きすることのない JBIC の活動辞令を知ることができたことに加え、インフラ整備のみならず、その後の経緯コンサルティングまでをコーディネートする点が興味深かった。
19	JBIC の活動が明確に伝わった。

ダッカのストリートチルドレン支援活動

1	バングラデシュに行ったときにストリートチルドレンを多く見かけて、支援できたらいいのに、と思っていたから。
2	小さい子が好き。大切にしたい。
3	自分の興味がある分野が「子どもたちへの支援」であるため。草の根レベルでの話が興味深かった。
4	もともと興味のある分野でしたので、現場の声を聞けたことが良かったです。
5	活動内容が具体的で、現地の様子がイメージしやすかった
6	町の人の子どもに対する見解が変わったと言うこと、全体のお話に興味を持った。
7	ストリートチルドレンについては、私自身も興味がある。子供銀行は特に興味深かった。
8	写真が多くてイメージをつかみやすかった。成果が着実に現れていてすごいと思った。
9	ダッカのストリートチルドレンに対して、具体的にどう活動しているのか、同変わってきたか分かりやすく知ることができた。バングラに行ってきたときには深く分からなかったことが理解できた。
10	ひどい仕事をしているなどと思った。ひどい、というよりも、なぜこんなお金にならない仕事をする状況に陥らなければならないのか、と思った。
11	ブラジルのストリートチルドレンの話を以前聞いたので。
12	開発教育などに興味があるため。
13	茨城で保育士をしているが、ストリートチルドレンの意味を全く知らなかった。
14	子どもたちの写真が印象的だった。女の子の支援も普及するようになれば、と思う。
15	貧困のテーマに一番興味を抱いているから良い勉強になった
16	イタリア南部に旅行をした際、子どもなのに「金をくれ」と言っている子がいて、アメをあげようとしたら「それではない」と言われた経験を思い出した。その出来事がすごく印象的で私は子どものころ働くなんていう環境じゃなかったから、自分が幸福だということが身にしみた。世界中の子どもたちが笑顔で生きてゆけるような支援を私もしたいと思った。
17	現場の様子が良く伝わってきた
18	以前から気になっている問題であり、支援をしているため
19	ストリートチルドレンを草の根の立場から支援し、成果をあげているところがすごいと思った。
20	個人的に興味のある問題だったので、更に考える機会になった
21	現地の子どもたちの写真などがあり、具体的で分かりやすかった。
22	実情が分かった。
23	実際の様子が鮮明に具体的に知ることができた

マラリア対策

1	トレーナーをトレーニングすることは重要だし、良い方策だと思った。
2	マラリア対策に興味があったから
3	JBIC の永井さんが1つだけ覚えていて欲しいとおっしゃった内容に大変共感した

援助関係者としてのキャリア形成

1	とても短時間でしたが、端的かつ具体的にご自身のキャリアを話してくださり、大変参考になりました。
2	実際の経歴、経験を知れた。
3	国際協力の現場で働きたいと思っているので大変参考になった。
4	将来的に開発関連の就職に関心がある。
5	どのようなキャリアで関係者の方々は仕事に携わってきたのか知れたかった。
6	これからの国際協力への関わり方など非常に参考になった。

YDP Japan Network からの発信

1	特に YDPJP からの発信が印象に残った。自分と同じ年代の人たちが自分たちにできることは何か、一生懸命考えている。自分もできることから始めようと思った。
2	同年代の人たちがどのようなことを考え、活動しているのかが知れてよかった。
3	ユースの声として、いろんな提案を聞けたのが良かった。

アンケート結果

4	自分と同世代の人々の活動を目の当たりにし、感銘を受けた。
5	日本国内での国際開発という意識は大変低いと思うが、広めようとしている組織やユースの組織の多さに驚いた。
6	同じ大学生として、その意見に共感でき、刺激にもなった。
7	国際協力業界にいと、日本以外の発展途上国ばかり目を向けがちになる中で、YDPJNの寺尾さんは、日本を含めた本当の意味での「地球問題」「課題」について語り、共感した。
8	国際協力を遠いものと感じがちだと思うが、自分にできることがある、それをもっと考えなくてはいけないと感じた。
9	共感した。
10	今までユースという団体を知らなかったので大変驚いた。
11	広報戦略の見直しの必要性を痛感させられた。情報を求めている方にはもちろんのこと、無関心層にどのように働きかけていくかは非常に重要な視点であると感じた。
12	同じ若者という立場から勉強になった
13	同世代の学生が主体的に活動をされている姿に大変刺激を受けた。
14	YDPJNは同じ学生として活躍している人のことを聞けてよかった。大阪会場の学生が「伝えること」の大切さを教えてくれ、自分にできることは伝えることしかない、他にあることは、としょげてしまったが、「伝えること」という自分の考えに自身を持てた。
15	自分の身近なことを振り返り、見つめなおす機会ができた。
16	YDPJNは名前くらいしか知らなかったので、団体のことが分かった良かった。
17	同じ学生の意見として関心を持てた。
18	日本にいるごく普通の人々に対して、とても示唆に富む内容だった。
19	自分と同年代であるため、面白かった。プレゼンの方法も分かりやすかった。

全体討議

1	TV会議システムを使っていることの意味が少し感じることができた。反面、1～7をなぜTV会議で行うのかという疑問を持った
2	各国（現場）からの生の声が聞けてよかった。
3	自分なりの国際協力を一人一人が確立していくことの重要性がよく伝わってきた。一人一人の声を聞くことが大きな影響を与える。
4	4地点でリアルタイムで討議ができ、面白かった。各地からのメッセージは心に残った。
5	いろいろな立場の人からの意見も聞け、自分なりの考えも持つことができた。最後のバングラとタンザニアからのコメントが良かった。
6	つながっている感覚が持てた。
7	いろいろな意見を参加者から聞けてよかった。
8	様々な立場で国際協力に携わっておられる方の意見が聞けたので、学生時代は国際協力を研究テーマにしていたのが、自分を良い意味でリセットするよい機会になった。
9	事前に提出した提案書にもとづき、意義のある討論だったと思う。
10	現地の人々とユース側とすぐに意見交換できて良かった。
11	また、周りの参加者の意見を聞いて、関心の高さに驚き、負けて入られないな！と思った。

複数プログラムへの回答

1,2,3,4	現地では問題が山積みであること、そして現地の方がひと心に入るような問題解決、ケアをされていることを実感できた。
1,2,4,5,7,8	今回のセミナーに参加したのは、途上国や開発に興味があるから、という理由だったが、今日、開発に携わる沢山の方の話を聞いて、自分の身近なところにも沢山の行動のきっかけ、方法があるのだということが分かった。今後は、単に興味だけに終わらず、積極的に小さなことからでも行動を始めて生きたいと思っている。
1,2,5	具体的な例があり、説明が正確であった。
1,3	バングラデシュとの回線が途中で途切れた。途上国の経済、社会システムがよく分かった。
1,3	意義、目的をよく理解できたため。
1,3	どの発表もよく準備された心のもったものだったが、特にJBICの持続的開発のための制度、組織への働きかけは意義のあるものと感じた。一般財政視線は、現地の人にもドナー側にも、目に見えない援

アンケート結果

	助ではありませんが、上記の考え方の線に沿った援助方法として参考となった。
1,3,5,6,8	全て印象に残っている。ただ、自分の興味のある開発事業については、特に印象に残った。全体討議は皆さんの意見が聞けて、とても参考になった。
1,6,7	国際協力に関わる仕事に就きたいと思っているのですが、どのようなところにどのような方法で就職したらよいか良く分からなかったから。
2,3	私たちが当たり前に受け止めていることも、一歩途上国に入れば、それは当たり前ではないということ、現地からの報告や写真を見て実感した。
2,3	JICA や JBIC などの活動の具体的な内容を現場の方から貴重な話を聞くことができた。
2,3	現地の状況は私の想像以上のものだったと思ったが、具体的な例を説明してもらい勉強になった。
2,3,4	新しいことを知れた。話し手の話し方が良かった。
2,3,4	実際に取り組んでいる内容、状況はなかなか知ることはできませんが、それを知ることができただけでも（今回のセミナーは）貴重なと感じた。
2,3,4	現地で JBIC や JICA, NGO の方々がどんな仕事をしているのかを知ることができ、自分の進路選択について考える機会となった。
2,3,4	バングラデシュの取り組みが具体的で、（自分で）行ったことがなくてもどんな問題があるのかわかりやすかった。
2,3,4	現地の取り組みが非常にわかりやすかった。また、3者（JICA, JBIC, NGO）のお話がとても熱意があり、今後に期待したいと思った
2,3,4	現地の人たちの悩みや苦悩、問題点が良く分かった。
2,3,4,5	具体的な働きを活動している方から聞くことができて、強い印象を受けた。とりわけ、水道公社の再建はすばらしい働きだと思う
2,3,4,5	具体性。
2,3,4,5	実際にどのような活動をしているのかが具体的に聞く事できた。わかりやすくて興味が持てた。
2,3,4,6	途上国での仕事やプロジェクトのイメージが少し分かるようになった。
2,3,7	各活動、現場の声を聞くことができた。
2,4	発展途上国の実情を見ることができ、それに対する取り組みも詳しくわかった。
2,4	プレゼンがわかりやすかった。
2,4	写真を通して、少しでも現地の様子を感じることができたので。
2,4	簡潔でありながらわかりやすかった。写真などを使用している点も良かった。
2,4	教育に興味がある。
2,4	実際の問題が目に見えて理解でき、それに対しての取り組み方が分かったのでとても印象に残った。
2,4	わかりやすかった。
2,4,5	ダッカのゴミの現状や下水道処理の価値観が全く違うバングラデシュ政府に提案して行く難しさがとてもよく分かった。
2,4,5	現場でどのようなことに困っているのか、という具体的な話を知ることができたから。
2,4,5	援助のもっと具体的なイメージがわいた。
2,4,5,6	国際開発をキャリアとして頑張る人たちの話は特に参考になった。この分野で働くために、これから勉強するための のような内容は参考になる。
2,4,5,7	「公衆衛生に関する意識向上」は、健康を守るための根本的な解決策になると思いますが、今日のプレゼンで改めて考えさせられた。また戦争や政治の犠牲になる子どもたちの深刻な現状問題を知ることができた。
3,4	作ったインフラを維持管理する制度が必要。（説明を聞いて）メンタルな部分が変わった。
3,4	想像しやすく、（自分の？）範疇での援助の話だった。
3,4	自分が参加している NPO 団体との共通点である「現地の人たちが自立的に行えるよう支援していく」ということに共感を持てた。
3,4	政策のおおまかな流れがわかりやすく、とても興味深い内容だった。特に は活動における苦労や喜びが感じられて印象深かった。
3,5	実際に現地でどのような援助が行われているのかを知ることができた。
4,5	地道な活動の積み重ねが成果につながって言うのだと実感できる内容だった
4,6,7	自分もユース世代で考えることができた。
4,6,7,8	様々な活動を実際に行っている方々の生の声をきけて、自分自身で考える糧となった。
4,7	開発教育などに興味がある。ストリートチルドレンの状況を日本の子供たちに伝えたい。きっと大きな効果があると思う。
4,7	もともと子どもに興味がある。私は学生なので、YDPJN からの発信に共感するところがあった。
5,3,4	発表者の方の熱意と計画がすごく具体的で、実効性が高いように感じられた。
5,6	現在社会人1年目で、民間企業に就職したが、現在真剣に国際開発の仕事に携わって生きたいと考えているため。専門家としての関わり方やマネジメントの立場に興味がある。

アンケート結果

6,8	今の自分の聞きたいことがズバリ聞けた。
7,8	～ は結構知っていることで、～ は新しい考えに触れることができた。
7,8	同じユースとして、ユースからの提案にとっても関心があり、自分の活動を見直す良い機会になった。
7,8	身近に感じることができ、いろいろ考えさせられた。
7,8	～ は出版関係から得られることのできる情報で、特に印象になったというのではない。しかし、 に結びつけるのには必要なプロセスだったのかとも考える。

全て印象に残った

1	全てを通して、まさに「援助の関係者だけでなく、現地の人々の顔」が見えるセミナーだった。加えて、 交流の場があることがすばらしいと思った。
2	全てがとても新鮮で刺激された。自分の夢に不安もあったが、まっすぐつき進もうと決心した。UNDP の JPO のお話が聞けたのもうれしかった。
3	知りたいことを知ることができた。

特に印象に残るものなし

1	財政支援を除き、特に印象に残らず。中身がなく、掘り下げ不足（他 3 件）。
---	---------------------------------------

4.3. 意見・感想

(1) 肯定的な意見・感想

	意見・感想
良かった	4地域が同じ空間を共有する、ということは難しいし、また有意義なことであると思った。途上国支援というテーマでうまくひとつの空間ができあがっていたと感じた。
	学生の多さにびっくりした。日本もまだまだ捨てたものではないと感じた。
	総合司会が素晴らしい。この方のおかげでとても有意義な会になったと思う。
	活動の具体例が示されているのが良かった。
	現地で活躍している人たちと直接聞けた分、訴求力が伝わってきた。YDPの活動をはじめて知った。
	実際の現場の報告に若い方が活動に在る姿に敬服。単発ではなく、ずっと継続して活動できるよう、しっかり引き継ぎに帰ってきて欲しいと思った。
	テレビ電話はすごい。バングラデシュとタンザニア、そこで働いている人たちが身近に感じられた。
貴重な機会だった	日本にいる人々で何がどう必要か、何ができるかということを考えていく良い機会になりました。
	様々な情報を知ることができてよかったです。まずは知ることから始めて行きたいと思います。今日は貴重な体験ができてよかったです。ありがとうございました。
	「子どもの夢募金」のようなものをしたことがあるが、今セミナーのような場で現地での子どもたちの様子を伺うことで、募金活動への理解が深まりました。
	セミナーが終わってみたら、とても短く感じた。貴重な機会だった。
	現在就職活動で、JICAの事業内容に興味を持ち参加したが、来て本当に良かった。現場でどんなことが行われているのか知ることができたし、一人の人間としてとても考える機会を持つことができた。
	セミナー自体は有意義なものだった。
	私は開発教育やODAというよりも、実は国際政治学を先行する学生です。ですが、様々な分野から途上国を見る視点というのも大切だと重い参加しました。期待以上に現地や、あるいは都市の近いユース団体の活動や視点を知ることができ、貴重な体験をさせてもらった。
	個人の私に国際協力のどんなことができるのか、とても考えさせられた。
	リアルタイムでバングラデシュ、タンザニアの方の話を聞けて、自分に何ができるのかと考える良い機会になった。
	自分の意識を変える、行動を起こそうと思える良い機会となった。
	バングラデシュ、タンザニアと結んでいることで想像力が高まる感じがした。とても有意義だった。
	様々な関わり方ができることを知ることができた。
参考になった	全体的に大変意義深かった。もっと現地のことを知ることが必要なのではと自分なりに感じる事ができた。
	現地とのTV会議に参加したのは初めてで、驚いたと共にリアルタイムの声を聞けてよかった。
気持ちが変わった	相談コーナーが盛況でした・学生や若い方々にとっては、このような情報交換、交流の場が大切であると認識できて、有意義であった。
	各国のプログラムの実態の紹介で現地の様子を把握する上で、非常に参考になった。しかし、ODAタスクフォース内の連携状況については把握できなかった。
	まず知ることが第一歩だと感じた。
	バングラデシュで活動されていた方とお話する機会ができ、何より「頑張ろう」と思った。
	もっと深く国際協力について考え、今後自分がやっていきたいと思っていることについて実施したいという思いが強くなった。自分から今後いろいろと勉強していきたいと思う。今からでは遅いと思わずにチャレンジしたいという追い気持ちがわいた。
	私は来年卒業する学生で、JICAやJBICを就職先として考えていた。今回このセミナー人参加してますます強く志望するようになった。
	日常生活の中で、自分に不自由がないと、貧困生活を強いられている方々を忘れてしまいがちになる。またこういう機会を持ち時々振りかえらなければと思った。
これから動きたい	一方的に援助するだけではなく、こちら側も学んでいける何かに取り組みたいと思った。東京会場での「途上国の人が頑張った分だけ成果を得られる社会」という発言にとっても考えさせられた。
	一言で国際協力と言っても、様々なアプローチがあることを踏まえて、今後は自分には何が出来るか、どのような形で協力できるのかを考えるようにしたいと思う。
	中継を使った大変興味深いセミナーだった。こんな貴重な機会はめったにない。現地の方の報告を受け、私も忙しい時期が終わり次第、学生で時間のあるうちに途上国でのボランティアをしてみたいと思った。
	国際協力として自分でできることは、まだ無限にあると思う。ユースの団体などで同世代の人がいろいろ行動しているのに、自分は具体的なことは何もしていない。国際協力を行っている団体は、JICA,JBIC,NPOも全て基本の考えは同じなので、なにかしらの形で動いてみようと思った。

	とてもよい勉強になった。モチベーションがあがった。何かしらの形で国際協力に携われるように情報を集め、考えていきたい。
	自分の所属する団体（PIEIE×PEACE FESTA）でも沢山の活動をしていきたいと改めて思った。大きなイベントを自ら楽しんで行うために、他の団体の方とも連携して行ってみたいと思った。
	インターンをしたい！今から関わりたい！
	YDP の樺澤さんが言っていたように、活動（や意識）を維持することがとても大切である反面、難しいこと。まず現状を知る（勉強）から始めたいと思う。
	おとしスリランカで教育支援を行ってきた。一度きりの体験であったことが心の中でもやもやしていたが、今からできる小さなことを行っていきたいと思う。
	テレビ電話での討論式のセミナーがとてもよかった。興味本位だけではなく、自ら情報収集して、こつこつできることから実行していきたいと思った。このようなセミナーをこれからもっと頻繁に開いてもらおうと、きっと多くの日本人の心に響くと思う。
	留学生としてできることがあったらやりたいと思った。今度、できれば他の国についてもやってくれればありがたい。
	これからもこういった機会を作りたい
	私には在日バングラデシュの親友がいます。今回セミナーでの現地の方のダッカの現状を聞き、自分が国際問題についていかに主体的でなかったかを痛感した。実にいい刺激になった。これから、自分に何ができるのか、何がしたいかを自身に問うて行きたいと思う。
	開発に関するお仕事を身近にされている方から、全く開発について分からないという方まで本当に幅広い人たちが参加・発信できるセミナーだと感じた。このような場をこれからも多く設けて欲しい。
再度開催、参加を希望	日本の開発教育について、教育関係者を交えたセミナーを開催していただきたいです。
	また参加したいという形でのセミナーを開いてもらいたい。特に立場の違う団体それぞれの視点からの発信を同時に聞けてよかった。
	今後もこのようなセミナーや勉強会を開いて欲しい。若者が国際（社会？）に対して、しっかりとした問題意識や視点を抱いていてよい刺激になった。
	現地の事情を知る良い機会になった。また同様のセミナーがあれば参加したい。
	このような機会を設けてくださり感謝している。なかなか個人ではここまで一度に沢山の方のお話を聞ける機会がないので、とても充実していた。またこのようなセミナーに参加したい。
	会場からも声が上がったように、このようなセミナーをきっかけに意識や関心を変える学生の皆さんは沢山いると思うので、是非このような機会を沢山作ってもらい、一般の方に発信していただければ、と思う。私も未熟ながら回りに少しずつ発信し、具体的な行動を起こして行きたいと思っているので。
	また他の国についてもこのようなセミナーを開催してもらえると嬉しい。
	また参加したい

（２）批判的な意見・感想、或いは要望

時間	時間が1時間近く遅れてしまい、後のプログラムを早口で終えねばならなかったのは大変残念。（他1件）。
情報過多	沢山のポイントが盛り込まれた関係者の協力には頭が下がる思いがしたが、同時に消化不良な点を感じた。
	活動内容数が多く、ちょっと表面的なことしか分かりませんでした。もっと一つ一つを詳しく知りたかった。
時間・内容について	いいお話は沢山あったが、情報がとても多く、発表している人も時間がなくて急いで話していたため、その想いが伝わりにくかった。また映像だと集中しにくかった。紹介するプロジェクトや情報量を減らしても良かったかな、と思う。
	各発表者は時間厳守しなさすぎる。質問の割り振りはどうなっているのか？YDP という各団体の説明に意味がない。みな同じで中身無し。本セミナーに失望。
	もう少し具体的なアクションプランを述べて欲しい（他1件）。
	もっと具体的な「自分にできる国際協力」の話、情報が欲しかった。
	すばらしい知識と経験があるのですが、UNDP のJPO(鈴木さん)の発表は不要だと思います。焦点がずれていました。そのままマラリアについて、もっと詳細を発表したほうが有意義。職に就くための発表はまた別途行えばよいのでは。
	テレビ電話を使っただけのセミナーは面白い取り組みだと思いました。ただ、対象が不明確のように思います。受け取った広報メールを読む限りでは、ある程度知識のある人に向けた現地 ODA の現状などを説明していただくセミナーに思えたので、少し期待と違った。内容を聞くと、国際協力に興味のない人向け？と思ってしまった。

	せっかく現地の人とつながっているのだから、もう少し後半の内容に時間を費やしたほうが良いと思う。もう少し真剣に話し合うなら話し合っても良いとおもう。最初の内容と最後の内容のギャップがありすぎる。
	学生向けのセミナーという印象を受けた。社会人向けのセミナーも開催して欲しい。
発表の工夫が必要	難しい言葉をできるだけ減らし、分かりやすくシンプルに話をすべき（特に ODA の説明、タンザニアの鈴木さんの説明）。大切なのは、きれいな言葉を使うことより、伝える言葉だと思う。 現地の人（その国の人）の話を聞きたかった。 現状を見せていただけて刺激になりました。「自分にできる国際協力」に関しては、報告が主で、またこれから国際協力を目指す学生さんにはイメージができるのかもしれませんが、JICA、JBIC、ADB などは、やはり特別な一部の人が関わる場であり、自分が一緒にできることだとは思われませんでした。「例えば・・・」のようにわたしたちにできることを提言していただきたかったです。 TV 会議システムを用い、双方向の意見交換の場を目指すのであれば、発表の連続+全体討議という形式では、全体討議になった時点で、どこにポイントを置いて討議していくか分かりにくくなる気がした。 話が堅すぎて一方的な感じがした。ツアーの話をした方のように、資料にしてもイラストを入れてみたりして、よりカジュアルに分かり易いものにして、より興味を持って話を心地よく聞けるよう（子どもに話すように）した方が、万人に参加しやすくなると思う。 せっかくパワーポイントを使っているのなら、発展途上国の現状をもっとうまく伝えることができるのではないかと思った。例えば、その国で問題となっていること写真や図にして見せて欲しかった。 スライドに字が多すぎて見にくかった。タンザニアの ODATF の話は少し堅苦しいかなと思った。せっかく現場の方々のお話なので、もっと現地の人々のこと、現状など臨場感のある内容が聞きたかった。その点、ダッカの説明はとても上手にプレゼンされていた。こういうセミナーをもっと開催してもらいたい。 硬い。普通のプレゼンで眠くなる。 分からない言葉が多かった。 せっかく援助国とダイレクトに映像情報を繋いでいるのだから、現地の人を出すなどライブ映像ならではのメニューを期待したい。日本人によるパワーポイント発表ならテレビ会議までやっている意味がない！ ODA の活動内容を知る良い機会となった。しかし時間が押している関係上、仕方ないのかもしれないが、発表する人の話が早くて聞き取りづらかった。あと、余計な部分の紹介が多かった気がする。
設営不備	会場の温度調節がうまくいってなく、寒くてつらかった（他 4 件）。 写真撮影がかなり頻繁にあり、前のほうに座っていたので少し目がちかちかした。

（３）提案・情報提供希望

情報提供希望	企業で働く一個人として、個人的に企業（Private sector）が、何ができるかということに興味があります（CSR 活動という意味も含めて）。そのような勉強会などがあったら教えていただけると大変うれしいです。よろしくお願いいたします。本日は貴重な経験でした。 今回のテレビ会議の全貌を納めたビデオをダビングして頂きたい。
提案	DVD にまとめて、日本の学校教育の現場で使って欲しい 私は女性問題を解決する国際公務員になります。だから女性問題に対しての実情をお聞かせ下さい。
セミナー後の交流を	出席者の希望としてはこのセミナー余韻が残っている間に、セミナー報告会の後立ち席 Party などとして頂き 出席者同士の会談機会を設けて頂ければ出席者同士でもっと色々話し合いが出来たと思います（東京会場）。 YDPJN の人が言っていたように、イベントで終わって欲しくないと思った。東京ではブースが出るということだったが、大阪でも大阪を拠点としている、あるいは活動を関西に広げたい団体を招いておけば、もっと参加者の具体的な第一歩となったのではないかと思う。 せっかく色々な人が集まる機会だったんだから、簡単な懇親会を準備してもらえたらよかった。東京では ブースが準備されていたそうですが、大阪は、資料が若干。大阪にも活動の拠点を置いている団体は結構あるので、事前にご連絡しておいて下されれば、やってみたい人と人材を求める団体が結びつく場になったんじゃないだろうか。このイベントにいくらかかったんだろ・・・私は、セミナーの内容もよかったんですが、帰路のバスの中の世代の違う新しい 知人が、一番の収穫でした。このような企画を有難うございました。
途上国の人の声を聞きたい	国際協力は大きく難しい問題、さらに複雑な問題であるために、どうしても専門家の方が政府に任せてしまいがちでしたが、国民一人一人の関心が高まり、多くの人が貢献できる社会にしていきたいです。途上国の方の想いも聞ければよかったと思う。 硬軟取り混ぜた、対象年齢も幅広く見られた、楽しいセミナーだった。次回は現地の生の声を聞けたらうれしい。

アンケート結果

	せっかくの現地中継だから、日本人だけでなく、現地の外国人の方の話も聞きたかった。
大阪の セミナー 開催 増設	もっとこのようなセミナーを特に大阪で開催してもらいたい。
	このようなセミナーが大阪でも開催されてうれしく思う。開発関係のセミナー勉強会の機会の良質共に、東京都地方の差は大きいと思う。地方でのこの種の活動をもっと開催してもらいたい。
	このようなセミナーを大阪でももっとやって欲しい。

(4) その他

分類	意見・感想
その他	実際の活動の紹介部分は自分にとって難しかった。
	競争原理の中での商社だけがCD 劇に参画ということが現実にあるようで、現場そのものが分割と競争の場におかれている現実をどう乗り越えていくのか？
	最低限の生活をみな平等に分け与えるようになったらいいなあ、と思った。現地の人々の紛争や貧困で受ける心の傷などをケアするカウンセラー的なものを贈るべきだと思う。心のケアを重視し、現地の人々の心を明るくし、自身や元気をもたせるため。
	もう少し、JICA へのアクセス（メンタル的にも物理的にも）が気軽になるような仕組みがあればうれしいです。

配布資料

- 別添 1 現地 ODA タスクフォースの説明
- 別添 2 バングラデシュ 現地 ODA タスクフォースの概要
- 別添 3 バングラデシュ ダッカの都市環境を知ろうツアー 』
- 別添 4 バングラデシュ 水道公社の経営再建
- 別添 5 バングラデシュ ダッカのストリートチルドレン支援活動
- 別添 6 タンザニア 現地 ODA タスクフォースの概要
- 別添 7 タンザニア マラリア対策
- 別添 8 タンザニア 援助関係者としてのキャリア形成
- 別添 9 セッション 2 YDP Japan Network
- 別添 10 提案用紙
- 別添 11 アンケート用紙

現地ODAタスクフォース

I. 現地機能の強化

* 効率的・効果的な援助の実施



* 我が国の援助政策の立案及び実施の体制の強化



* 被援助国と我が国の二国間関係、被援助国の開発ニーズを最も直接的に把握できる立場にある大使館、援助実施機関現地事務所等、現地の機能を強化することが必須

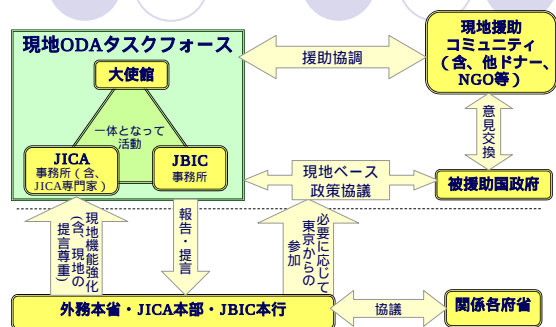


現地ODAタスクフォースの設置

II. 現地ODAタスクフォースの設置

* 大使館及びJICA、JBIC等、援助実施機関の現地事務所を主要なメンバーとして構成。(平成15年3月以降、現在までに69ヶ国について設置済。)

III. 現地ODAタスクフォース概念図



IV. 現地ODAタスクフォースに期待される役割

1. 開発ニーズ等の調査・分析
2. 援助政策の立案・検討
3. 援助対象候補案件の形成・選定
4. 現地援助コミュニティとの連携強化

IV. 現地ODAタスクフォースに期待される役割

5. 現地の我が国関係者との連携強化
6. 我が国経済協力のレビュー
7. 情報公開と広報



バングラデシュ・タンザニア現地ODAタスクフォース主催
援助の現場と日本を結ぶ開発セミナー「途上国の人たちとともに未来を創る！」

バングラデシュ 現地ODAタスクフォース ～より効果的・効率的な援助のための現場での取り組み～



JETRO

1. バングラデシュってどんな国？

- 国土面積: 14.4万km²(北海道とほぼ同じ面積！)
- 人口: 1億4,050万人(2003年)(日本より多い！)
*全人口の70%が農村部に居住
- 一人当たり所得: US\$440(2004年)(日本はUS\$37,180)
- 経済成長率: 5.4%(2004/2005年)(成長を続ける最貧国！)
- 主な産業: 縫製業、農業(就業人口の62%が農業に従事)
- 識字率(成人): 全体39%(男性46%、女性32%)(2002年)
- 衛生施設(衛生的なトイレ)が利用可能な人口の割合: 48%(2002年)
- 栄養不足(低体重)の子どもの割合: 52%(1995-2003年)
- 自然災害(洪水・サイクロン等)が頻発
- 人間開発指数: 139位/177カ国(2003年)



Bangladesh

2. バングラデシュ現地ODAタスクフォースの特徴は？

- 通称『バングラデシュ・モデル』＝大使館・JICA・JBIC・JETROを中核とする日本の援助関係者のグループ。
- 組織を超えて分野ごとにチームを編成！
分野(セクター)ごとにチームを編成し、援助方針や5年間の援助計画(ローリングプラン)の作成・実施、他の援助国や国際機関との連携を主導するなど、一体性・一貫性のある支援を通じて、援助効果の最大化を目指しています。
- 積極的な情報発信・情報共有！
インターネット(ウェブサイト、メーリングリスト、メールマガジン、ブログ等)を先進的に活用し、幅広い関係者への情報発信や相互の情報共有を推進しています。
<http://www.bd.emb-japan.go.jp/bdmodel/>
- オープンなネットワーク！
開発援助勉強会などを通じて、NGO、国際機関、研究機関、民間企業をはじめとする幅広い関係者間の出会いや対話の機会を創り出し、相互の理解や連携を深めています。

3. バングラデシュへの日本の援助は？

日本の国民一人当たり 年間110円に相当！

□援助の方針は？

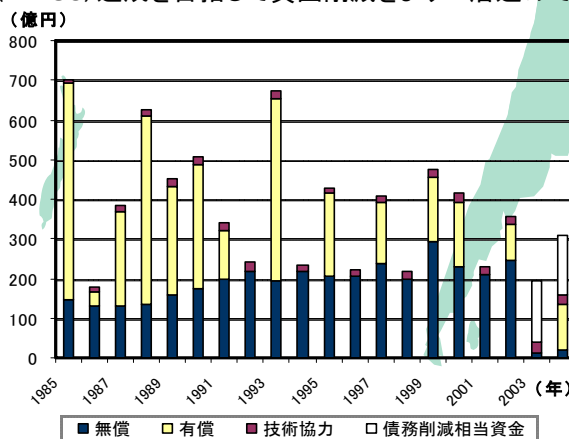
国別援助計画(2006年)では、ミレニアム開発目標(MDGs)達成を目指して貧困削減をより一層進めていくため、以下の項目を柱にしています。

- ❖経済成長
- ❖社会開発と人間の安全保障
- ❖ガバナンス

□取り組んでいる分野は？

以下の9分野(セクター)です。

- ❖民間セクター開発(ICT、観光を含む)
- ❖運輸
- ❖電力
- ❖農業・農村開発
- ❖教育
- ❖保健
- ❖環境(砒素対策を含む)
- ❖災害対策
- ❖ガバナンス



バングラデシュへのODA額の推移 (1985-2004年)

二国間のODAに加え、世銀、ADB、国連などの国際機関を通じて、分担金・出資金・拠出金・信託基金等による支援も行っています。また、他の援助国や国際機関との連携も積極的に行っています。

jica

バングラデシュ・タンザニア現地ODAタスクフォース主催
援助の現場と日本を結ぶ開発セミナー
「途上国の人たちとともに未来を創る！」

と、JICAの現場の仕事

『ダッカの都市環境 を知ろう ツアー♪』
開発セミナー編

JICAバングラデシュ事務所
武士俣 明子

2006年3月11日

jica 本日のツアーコース

(JICAの仕事)

1. ダッカの都市環境って？	現状の分析
2. 何が問題？何が必要？	問題の分析
3. どうやって解決しよう？	開発調査
4. 主要メンバーと役割	出演者
5. これから目指すもの	将来計画

さあ、さっそくダッカの都市環境と
JICAの仕事を知るべくツアーに出かけましょう♪

jica 1 . ダッカの都市環境って？

□ まずは、ダッカの様子を
のぞいてみましょう。



jica 1 . ダッカの都市環境って？

□ ダッカの都市環境の問題は？

- 人口急増、無秩序な都市の拡大が進行
- 車が增加、渋滞が悪化。大気汚染も深刻。
- スラムが拡大
- 水の供給が不足。
- 下水道の整備が不十分
- 雨期には浸水被害
- 街中にゴミが散乱。
- 生活・産業廃水が川を汚染。

では、ダッカのゴミの様子をのぞいてみましょう。

jica 1 . ダッカの都市環境って？

□ もし、このまま放っておいたら、

- ✓ 人とゴミは増加
- ✓ 街中のゴミも増加
- ✓ 衛生状態・景観が悪化
- ✓ 河川や土壌の汚染
- ✓ 処分場の環境問題が深刻化
- ✓ 雨期の浸水も深刻化

ダッカは「人」と「ゴミ」で埋まってしまう？！

jica 2 . 何が問題？何が必要？

問1：街中にゴミが散乱してるのはなぜか。

回答1：住民の意識と行動
「ボイ捨ては当たり前」「家の外はゴミ箱」

回答2：行政にゴミ管理の将来計画がない。
「いきあたりばったりの仕事になってしまいます。」

回答3：ゴミ管理の仕事の経験がない。
「どこに、どんなゴミがあるのかわかりません。」
「効率よくゴミを集める方法・処理方法わかりません。」

回答4：人と物とお金がない。
「お金がないのでできません。」
「誰がやるの？」「物を下さい。」

???

jica 2. 何が問題？何が必要？

問2：何をしないといけないのか？

回答1：住民の意識と行動

環境への意識とモラルを高めてもらう必要あり。

回答2：行政にゴミ管理の将来計画がない。

現状調査、将来予測、将来計画を立てる必要あり。

回答3：ゴミ管理の仕事の経験がない。

ゴミ管理の意味を理解し、方法を学んでもらう必要あり。

回答4：人と物とお金がない。

人材を育て、必要なものを揃え、予算をつける必要あり。

➡ JICAの出番！

jica 3. どうやって解決しよう？

開発調査「ダッカ市廃棄物管理計画調査」

目的：ゴミ管理の将来計画（マスタープラン・M/P）を作成

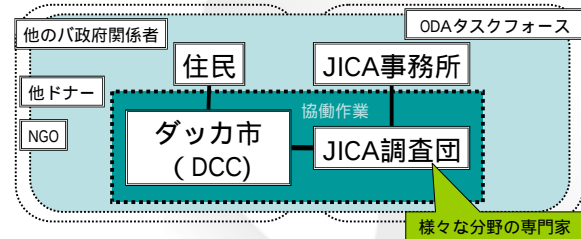
内容：

- ✓ ゴミの現状を調査（現状調査）
- ✓ ダッカ市の将来像を予測（将来予測）
- ✓ ゴミ管理の将来計画（M/P）を策定（計画策定）
- ✓ ダッカ市（DCC）の職員と協働で作業、研修実施（人材育成）
- ✓ 住民参加型のゴミ収集システムを住民と一緒に確立（住民啓発）

➡ Clean Dhaka マスタープランの完成！

jica 4. 主要メンバーと役割

□ どんな人がどんな仕事をしているのかというと、



DCCとJICAの取組みをのぞいてみましょう。

jica 5. これから目指すもの

□ M/Pに基づいてClean Dhakaを実現！

- ✓ DCCによる計画的なゴミ管理の実施
- ✓ 適正な技術の導入
- ✓ 関係者・住民意識の向上 ← 最も重要！

ダッカのチャレンジは続く・・・。



ツアーへのご参加
ありがとうございました。

JICA Bangladesh Office



水道公社の経営再建に挑む!!

～ バングラデシュ 「カルナフリ上水道整備事業」 ～

国際協力銀行
ダッカ駐在員事務所
駐在員 永井進介

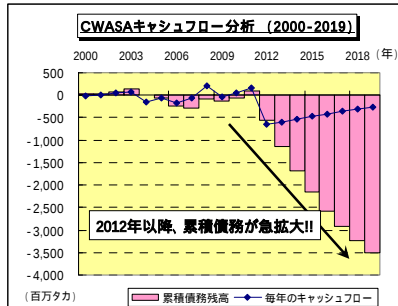
事業の概要

事業都市: チッタゴン市 (第二の都市)
都市特徴: 産業拠点、上水普及率48%
事業名: カルナフリ上水道整備事業
実施機関: チッタゴン上下水道公社(CWASA)
借款額: 122億2400万円 (事前通報額)
事業期間: 2006年 - 2010年
事業目的: (1) 浄水場及び送配水網の整備
(2) 水道公社の経営再建



今日のプレゼンテーマ!!

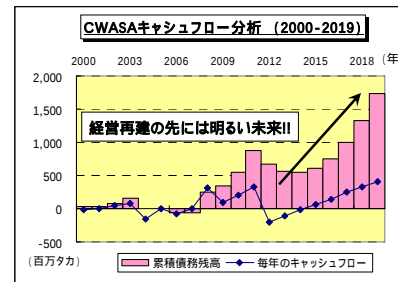
CWASAは経営破綻の危機だった。



[出所] CWASAの監督官庁 (LGD) への説明資料 (05年4月)

CWASAによる3つの提案。

未払金の回収、水道料金の引上げ、累積債務のリストラ



[出所] CWASAの監督官庁 (LGD) への説明資料 (05年4月)

提案はどこまで実現されたのか?

■ 未払い金の回収

監督官庁の未払金「約2億円」をほぼ回収。その他政府向けも8%減、民間向けについても歯止めがかかった。

■ 水道料金の引き上げ

06年2月、事前承認なしで5%まで「料金調整を行える権限」がCWASAに付与された。何時、水道料金を引上げるかがポイント。

■ 累積債務のリストラ

財務省に「債務返済繰り延べ(案)」が提出された。財務局長は承認済、次官、大臣の承認待ちの状況。

何故、経営再建が必要なのか!?

- 恒常的な赤字と返済免除は財務規律を緩ませる。
- 新規投資を外部資金に頼らざるをえない。
- 事業の持続性にも懸念が生じる。

経営再建

- 維持管理、新規投資への自己資金が生まれる。
- 職員のモチベーションの向上に繋がる。
- 政府の財政負担も明確化される。
- 事業が効果的に実施され、持続性が確保される。

他にも、こんな支援をしています。

- 国際会計基準に沿った財務諸表の作成
- 会計システムのコンピューター化
- 組織体系の見直し(組織図、採用計画等)
- 管理情報システム(MIS)の改良
- 不良メーターの修理
- 料金回収員のマニュアル作成
- 広報強化(住民啓蒙、DVD作成) 等々。



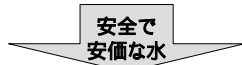
日常業務として定着、制度化することが重要!!

今後、こんな支援をします。

- 地理情報システム(GIS)の導入
- 漏水対策 (JICA連携も模索中)
- 財務システム全体のコンピューター化
- 組織体系の改革
- 会長直轄部局の新設(戦略、MIS、広報)
- 設計、維持管理の標準化

将来の夢

- 一日でも早い浄水場、送配水網の整備
- 都市スラムへの給水
- CWASAの経営自立化
- CWASA改革の他水道公社への伝播



貧困緩和、民間企業支援に繋がる!!

案件成功の鍵

- バ政府、監督官庁の決断
- 経営者の強いリーダーシップ
- CWASA職員のオーナーシップ
- 他の援助機関との調整、連携
- JBICの適切な支援の継続
- JBICのスムーズなフェーズアウト

JBICの仕事とは？

- 開発事業のプロデューサー
- 改革のプロモーター
- 途上国のサポーター

Thank you!!

子どもたちが社会に受け入れられ、健全に成長するために

～ダッカのストリートチルドレン支援活動

2006 年 3 月 11 日

シャプラニール＝市民による海外協力の会
ダッカ事務所長 藤岡恵美子

1. シャプラニールについて

- ・ 1972 年～ バングラデシュ農村での活動開始（現在 3 つの現地パートナー NGO が独立）
- ・ 1996 年～ ネパール プロジェクト開始
- ・ 2000 年～ 都市ダッカでのストリートチルドレン・プロジェクト開始
- ・ バングラデシュ事務所 スタッフ 15 人（うち駐在員 2 名）プロジェクト予算約 5 千万円

2. ストリートチルドレンの現状

- ・ 全国で 43 万人、その 49%（約 21 万人）がダッカ（by BIDS 2004）
- ・ どんな仕事をしているの？
- ・ On the Street Children と Of the Street Children
- ・ なぜストリートチルドレンになるのか（親の不和や離婚・再婚による虐待、働き先から脱走、誘拐、迷子、etc.）
- ・ 直面する危険・困難（おとなの暴力・搾取、社会からの差別、ケガ・病気、教育面、etc.）

3. シャプラニールのストリートチルドレン支援事業

- ・ 現地 NGO「オポロジェヨ・バングラデシュ」をパートナーとして
- ・ ジャットラバリのドロップ・イン・センター
 - 安心して休み、遊び、食事し、学べる場所
 - ロッカー、トイレ、シャワー、子ども銀行
 - 教育、カウンセリング（教師とカウンセラー、ソーシャルワーカーが対応）
 - 職業訓練
- ・ サイダバッドバスターミナルの青空学校
 - インフォーマル教育
 - フォーマル教育、職業訓練への橋渡し
 - 簡単な怪我の対応
- ・ 子ども会議、演劇などのイベント、遠足
- ・ 地域への働きかけ

4. 5 年の活動の中での変化

- ・ コミュニティの変化
 - 子どもたちの力を認識
 - 「自分のコミュニティの子どもたち」として
- ・ 子どもたちの変化
 - 衛生観念
 - モラル
 - 自信
- ・ スタッフの変化
 - 子どもの声をじっくり聞く（カウンセリングトレーニング）

5. 課題・今後に向けて

- ・ 治安
- ・ 安全なオルタナティブな仕事
- ・ 自立のための支援（教育、職業訓練、他機関との協力）
- ・ 女子への支援（使用人として働く少女支援事業立ち上げ）
- ・ より広い範囲へのアドボカシー（ダッカでのサポーターづくり、メディアへの働きかけ）
- ・ 子どもの参加（子どもの声を伝える表現の場、若者の力を生かす
- ・ 農村部での取り組み
- ・ いつまで支援するのか、どう引くのか

6. 日本でできる海外協力

- ・ 会員、マンスリー・サポーターとして
- ・ ボランティアとして
- ・ 子どもの夢基金
- ・ クラフトリンク（手工芸品）
- ・ ステナイ生活

以上

援助の現場と日本を結ぶ開発セミナー「途上国の人たちとともに未来を創る！」
(タンザニアODAタスクフォース)
発表者：横林 直樹、在タンザニア日本大使館経済協力班長

1. タンザニアってどんな国？

タンザニアの特徴

- ◆ 人口3千5百万人、国土は日本の2.3倍
- ◆ GDP約1兆円、国家予算4千1百億円
- ◆ 一貫して最貧困国
(一人当たりGDP200 - 300ドル)
- ◆ 社会主義時代の統制経済の経験とその破綻
- ◆ 80年代以降の恐慌経済(インフレ)、腐敗の横行
- ◆ HIPC = 国家の破産(巨額債務、G8による帳消し)
- ◆ 長期の経済建て直しと健全化の必要性
- ◆ 政治的な安定は大きなメリット
- ◆ 鉱業、観光業が急成長、その他産業は長期停滞

2. タンザニアの開発課題は？

タンザニアの貧困削減戦略

(1) 第1次PRS(00年 - 04年)

7分野への優先的支援

教育(特に初等教育)、保健、農業、水、道路、司法、
HIV/AIDS

(2) 第2次PRS(05年 - 09年)

NSGRP(National Strategy for Growth and Reduction of Poverty)

3つのクラスターへの支援

(イ)成長と所得貧困の削減

(ロ)生活と社会福祉の改善

(ハ)ガバナンスとアカウンタビリティ

3. どんな援助が行われているの？

一般財政支援 (GBS)

目 的：貧困削減戦略の実現

- ◆ 方 法：援助資金を政府の一般会計に直接投入
- ◆ 開始年：2000/01会計年度。05/06年度で6年目
- ◆ 支援国：14ドナー
 バイ：英国、EU、スウェーデン、ノルウェー、カナダ、デンマーク、
 オランダ、アイルランド、フィンランド、ドイツ、日本、スイス
 マルチ：世銀、アフリカ開発銀行
- ◆ 支援額：6930億シリング（約700億円）
- ◆ 対外援助に占める割合：36% BFと合わせて約55%
- ◆ 国家予算に占める割合：約16%

4. その援助の利点は？

プロジェクト援助との比較における利点

- ◆ 政府の優先セクターに集中的に資金を投入することが可能
- ◆ 政府の予算プロセスへの整合が可能
- ◆ 財政的に破綻した国における政府システムの改革を促進することが可能。
- ◆ 点の成果を面に広げることが可能
 （プロジェクトの成果を全国展開する資金が重要）
- ◆ リカレントコストへの対応が可能
 （公務員給与、プロジェクト成果の長期的な維持・管理）



タンザニア連合共和国 United Republic of Tanzania

1. 一般事情/Introduction

(1) 国土/Geography

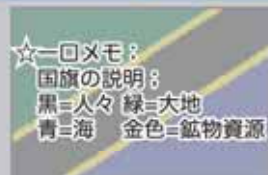
- (イ) 面積：94.5万km²
(日本の約2.5倍)
- (ロ) 首都：ドドマ
(法律上の首都、人口約76万人)
ダルエスサラーム
(実質的首都機能、約250万人)
- (ハ) 位置：東経29～41度
南緯1～12度の間
- (ニ) 気候：熱帯(沿岸)、温帯(高地)
- (ホ) 土地利用(1993年)：
耕作可能地：6%；作物耕作地：1%；
牧草地：40%；森林：40%；その他：18%
灌漑地：1,500平方キロメートル
- (ヘ) 天然資源：水力、錫、金、
鉄鉱石、石炭、ダイヤモンド、宝石用原石
リン酸塩(エステル)、天然ガス、ニッケル
- (ト) 観光資源：
(a) 大自然：キリマンジャロ、ヴィクトリア湖
タンガニカ湖、ニャサ(マラウイ)湖等
(b) 野生動物保護区：国土の7分の1
セレンゲティ国立公園、ゴンベ国立公園、
ンゴロンゴロ公園、ザンジバル島等々

(2) 国民/People

- (イ) 人口：約3,660万人(2004年)
(a) 増加率：1.9%(2004年)
- (ロ) 民族：スクマ族、マコンデ族、
チャガ族、ハヤ族等約130部族
- (ハ) 言語：スワヒリ語(国語)
英語(公用語)
- (ニ) 宗教：イスラム教(31%)、
キリスト教(25%)、
伝統宗教(44%)
※ザンジバルではイスラム教(99%)

(3) 略史/History

- 1881年：ドイツ領となる。
1920年：英国委任統治領となる。
1961年：独立(ニエレレ首相)
1962年：共和制移行
(ニエレレ大統領)
1964年：タンガニーカ・
ザンジバル合邦、
タンザニア連合共和国成立
1985年：ムウィニ大統領選出
1990年：ムウィニ大統領再選
1995年：ムカバ大統領選出
2000年：ムカバ大統領再選
2005年：キクウェテ大統領選出



出典：外務省ホームページ(2006年1月現在)
CIA The World FactBook(10 Jan. 2006)
世界銀行ホームページ
駐日タンザニア大使館ホームページ等

2. 政治・経済/Politics and Economy

(1) 政治/Politics

- (イ) 政体：共和制
(ロ) 元首：
ジャカヤ・ムリシヨ・キクウェテ大統領
(2005年12月21日就任、任期5年)
(ハ) 議会：一院制/任期5年/定員295名
(ニ) 政府：(a)首相：エドワード・ロワサ
(b) 外務国際協力相：アーシャローズ・ミギロ

(ホ) 内政：

- (a) 独立・合併：ニエレレ大統領：内政安定
(b) 「アルーシャ宣言」アフリカ型社会主義
(c) 85年：ムウィニ大統領政権交代
(d) 86年～：構造調整、経済自由化推進
(e) 92年：複数政党制導入
(f) 95年：複数政党制初選挙
(g) 95年選挙：ザンジバル：政治的対立
00年選挙：死者・タンザニア初難民発生
(i) 05年の選挙：全体として民主的、平穏裡
かつ透明性を確保して実施；キクウェテ新
大統領選出/カルメ ザンジバル大統領再選

(ヘ) 外交：

- (a) 非同盟政策
(b) アフリカの統一及び
未解放地域の独立を提唱
(c) アフリカ統一機構(OAU(当時))
リーダーシップ発揮@国連等の国際場裡
(d) 近隣諸国との関係良好
(f) コンゴ(民)及びブルンジ等
大湖地域情勢の安定化へ尽力
(g) 東アフリカ共同体(EAC)：
ケニア、ウガンダとの三国間協力推進
1999年11月：EAC設立条約署名
2001年1月：EAC正式発足
2005年1月：EAC関税同盟発効
(h) 南部アフリカ開発共同体(SADC)：
2003年8月：議長国(1年間)

(2) 経済/Economy

(イ) 概況：

- (a) 社会主義経済政策推進
(b) 石油危機、対ウガンダ戦争、旱魃の影響
(c) 80年代：経済危機的状態(インフレ)
(d) 86年～：世銀・IMFの支援-経済改革
(e) 00年～：マクロ経済の安定
(i) 平均6%の経済成長(下記図1参照)
(ii) 5%以下のインフレ率
(iii) 外貨準備高の増加
(f) 一人当たりGNP\$210(97)→\$330(04)
(g) 国家予算：4,100億円(仙台市一般会計程度)
(h) 歳出超過(又)(a)(b)参照)

(ロ) 国家経済規模：

- (a) 国民総所得 GNI：116億米ドル(04)
(b) 国内総生産 GDP：104億米ドル(05)
(ハ) 国民平均所得：
(a) GNI/capita：330米ドル(04)
(b) GDP/head：275米ドル(05)
(ニ) 実質GDP成長率：6.3%(04)
(ホ) 物価上昇率：4.0%(04)
(ヘ) 為替レート(04;平均)：
1米ドル=1,043.3タンザニア・シリング
(ト) 対外債務残高：8,138.9百万米ドル
(チ) 金/外貨準備残高：2,049.4百万ドル

(リ) 主要産業：

- (a) 農業(GDP約50%)：メイズ、
キャッサバ、米、豆類、コーヒー、綿花等
(b) 鉱業：金、ダイヤモンド生産
(c) 工業：農産物加工(サイザル麻・
タバコ等)
(d) 観光業：年々伸張、有望視
(e) <ザンジバル>コブラ、やし油

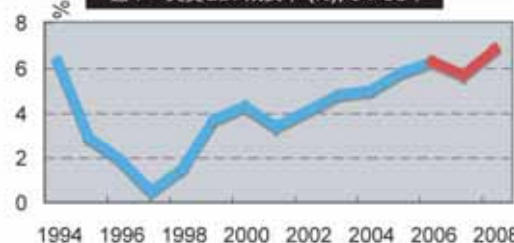
(ヌ) 貿易額(04)：

- (a) 輸出(FOB)：1,334.9 百万米ドル
(b) 輸入(FOB)：2,281.2 百万米ドル
(ル) 主要貿易品目
(a) 輸出：鉱物、製造物、タバコ、
カシュナッツ、コーヒー
(b) 輸入：消費財、産業資材、一般機械、
輸送機械、石油

(ヲ) 主要貿易相手国(03)

- (a) 輸出：日本、印、蘭、英
(b) 輸入：南ア、中国、日本、印

図1：実質GDP成長率(%); 94-08年





タンザニアと開発 Tanzania & Development

3. 開発・貧困指数/Indicators

(1) 貧困/Poverty

- (イ) 人間開発指数 (HDI) : 0.418
(世界第164位)
- (ロ) 所得格差 (ジニ係数) : 若干拡大
0.34 (91年) → 0.35 (01年)
※0 : 完全平等/1 : 完全不平等

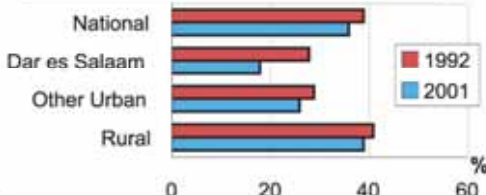
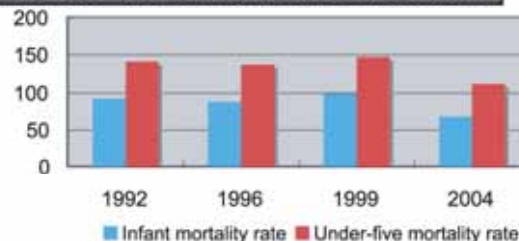


図3 : 国家貧困線以下生活者の割合 (地域別)

- (イ) 初等学校就学率 (ネット) : 改善
58.8% (00年) → 95% (05年)
※2000年授業料廃止
- (ロ) 識字率 : 69.4% (15歳以上成人)
76.2% (15-24歳女性)

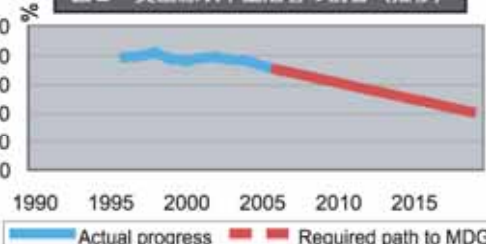
図5 : 幼児・児童 (5歳以下) 死亡率 (1,000人中)



- (イ) 平均余命 : 悪化→伸張?
50年 (90年) → 43年 (02年)
→ 47 (or 42.7) 年 (04年)
- (二) HIV感染率 : 8.8% (15-49歳成人)

- (ロ) 水へのアクセス : 改善、*格差
32% (90年) → 58.3% (03年*)
(* 73% : 都市部、53% : 農村部)
- (4) 水/Water

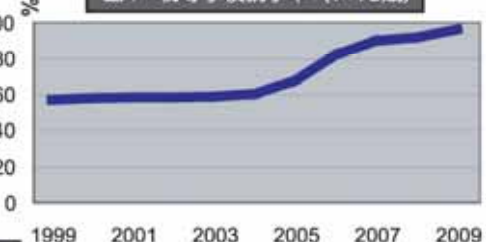
図2 : 貧困線以下生活者の割合 (推移)



- (ハ) 国家貧困線以下 : やや改善※格差
39% (91年) → 36% (01年)
※都市部と農村部の差大

(2) 教育/Education

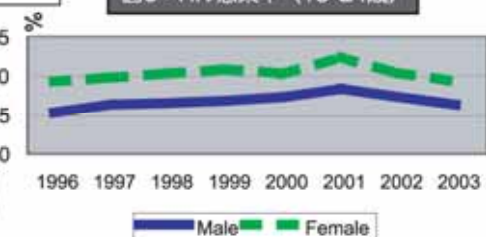
図4 : 初等学校就学率 (7-13歳)



(3) 保健/Health

- (ロ) 幼児死亡率 (1,000人) : 改善
100 (00年) → 68 (05年)
- (ハ) 児童死亡率 (1,000人) : 改善
156 (00年) → 112 (05年)

図6 : HIV感染率 (15-24歳)



4. 開発戦略/Development Strategy

(1) タンザニア開発戦略系譜

95年 : ムカバ大統領就任 : 行財政改革の進展
ヘライナーレポート

援助協調の進展(セクタープログラム)

97年 : 「国家貧困撲滅戦略 (NPES:

National Poverty Eradication Strategy)」
→ 貧困削減のための国家戦略フレームワーク

98年 : MDF (Multi Debt Relief Fund)

99年 : 「タンザニア開発ビジョン2025」

→ 開発の方向性 (生活の質の向上、グッド・ガバナンス
と法の支配の確保、強く競争力のある経済)

00年 : 第1次PRS (00年-04年)

「貧困削減戦略文書 (PRSP:

Poverty Reduction Strategy Paper)」

拡大重債務貧困国 (HIPC) イニシアティブ
に基づく債務救済の適用

「タンザニア支援戦略 (TAS:

Tanzania Assistance Strategy)」

→ GoTとドナー間で合意の社会経済開発のための戦略書

01年 : PRBS : 一般財政支援

05年 : 第2次PRS (05/06年-09/10年)

「成長と貧困削減のための国家戦略

(NSGRP: National Strategy for Growth and
Reduction of Poverty) / MKUKUTA」

→ 貧困削減を最大目標に据えたより包括的な政策枠組

「合同支援戦略 (JAS: Joint Assistance
Strategy)」の議論開始

→ NSGRPへ資金・資源提供のための援助モダリティ/

手続きに関する、夕政府とドナー間の戦略書

キクウェテ大統領就任 : 改革路線を踏襲

(イ) NPES

- (a) 2010年までに
極度の貧困半減
- (b) 2025年までに
全ての貧困撲滅

(ロ) PRSP:第1次

- 7分野への優先的支援
教育 (特に初等教育)、
保健、農業、水、道路、
司法、HIV/AIDS

(ハ) NSGRP

- (a) 特徴
- ・ オーナーシップ重視
 - ・ 結果志向
 - ・ 分野横断的な
アプローチの採用
- (b) 貧困削減に貢献する
3つのクラスター
- (i) 成長と所得貧困の削減
 - (ii) 生活の質の改善と社会福祉
 - (iii) ガバナンスと
アカウンタビリティ

(二) 一般財政支援

- 各ドナーが単独で個別のプロ
ジェクトを実施するのではな
く、夕政府の財政 (一般会計)
にODA資金を直接投入。
- ・ ODA資金は国内開発予算と
ともにマクロレベルの行財
政改革を促進
 - ・ 政府とドナーが協調して成
果をモニタリング&評価

(ホ) コモンファンド

- 特定のセクターや中核改革分
野 (公共財政管理等) のプロ
グラムへODA資金を投入。

(2) 援助協調の動向

- (イ) 政府・ドナーが政策レベルでの協議を通じ、
具体的な開発事業を進めて行く
- (ロ) タンザニア「援助協調の最先端国の一つ」
- (ハ) 援助効果向上のため
- (a) タンザニア政府のオーナーシップの拡大
 - (b) 開発戦略への整合性
 - (c) 取引費用の削減



タンザニアでのマラリア対策 (日本の取り組みについて)

2006年3月11日

マラリア対策アドバイザー 金森 将吾
JICAタンザニア事務所員 守屋 貴裕

1. 「マラリア」とは？

- マラリア原虫による高熱症
- ハマダラ蚊を媒介に感染
- 全世界で1年間にマラリアで亡くなる人：
約100万人(90%がアフリカ)

2. タンザニアの現状

- 年間1600万～1800万人のマラリア患者
- 年間10万人がマラリアによって死亡
- 外来患者の30%がマラリア患者
- 医療施設死亡の25%がマラリアによるもの
- マラリアによる経済的損失はGDPの3.4%

3. タンザニアの取り組み 「成長と貧困削減戦略(2005-10)」

- マラリアによる5歳未満児の死亡率を8%に低下
- 薬剤付蚊帳の普及と適切な使用
(長期残効蚊帳の推奨)

4. タンザニアのマラリア政策 ～国家中期マラリア戦略2002-2007～

上位目標

- タンザニアの全21州で、マラリア罹患率とマラリアによる死亡率を(1)2007年までに25%減少させ、(2)2010年までに50%減少させる。

戦略

- 1 マラリア疾患のケースマネジメントの改善
- 2 蚊帳の使用によるベクターコントロール
- 3 妊婦へのマラリア予防
- 4 異常発生への対処と予防措置



5. タンザニア包括的マラリア対策プロジェクト ～プロジェクトの前フェーズ～

1993年～2002年

- マラリア対策現地国内研修
 - 1993年～1997年がフェーズI、1998年～2002年がフェーズII
 - 臨床検査技師500名と看護師500名を対象
 - 約100台の顕微鏡(アクリジンオレンジ法)を供与
 - 保健省マラリア対策プログラムが主体となって実施、日本人短期専門家も数名投入

6. タンザニア包括的マラリア対策プロジェクト ～プロジェクトの概要～

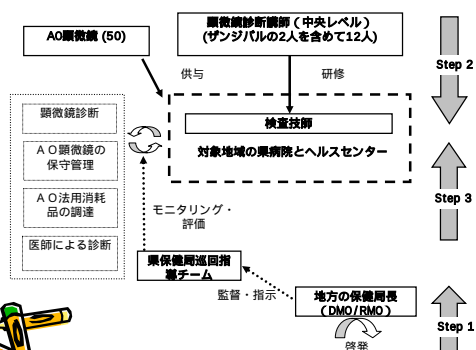
- 期間は2004年11月から3年間
- 対象地域は12 県程度
- プロジェクトコンポーネントは3つ
 - － マラリア診断強化
 - － マラリア疾患の看護強化
 - － ハマダラカ生息地の環境マネジメント

7. タンザニア包括的マラリア対策プロジェクト ～マラリア診断強化～

- 現状は？
 - － 顕微鏡によるマラリア検査の精度が低い（70 %前後）
 - － 検査結果が信用されず、マラリア治療薬が過剰に処方される
- プロジェクトの狙い
 - － 臨床検査技師の顕微鏡によるマラリア検査技術を強化する
 - － 習得した検査技術がちゃんと現場で使われるようにする

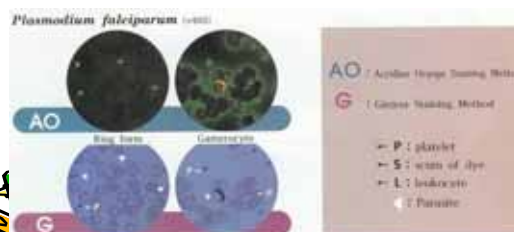


プロジェクト実施のフローチャート (マラリア診断強化)



アクリジン・オレンジ法(AO法)について...

- マラリア顕微鏡診断法の一つ
- 従来のギムザ法より早くて簡単
- 熟練していない臨床検査技師でも正確な診断が可能



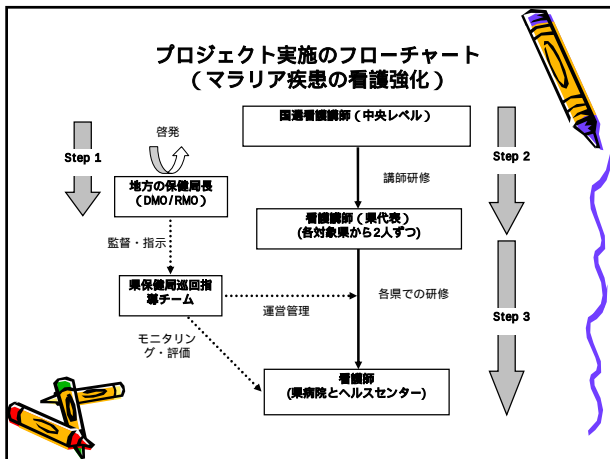
プロジェクトのアプローチ (マラリア診断強化)

- 研修後のモニタリングを重視
- 集団研修だけでなく、各施設での実地研修を採用
- 診断精度の改善をデータで証明



8. タンザニア包括的マラリア対策プロジェクト ～マラリア疾患の看護強化～

- 現状は？
 - － 看護師がマラリア治療薬の投与基準を把握していない
 - － 点滴投与する薬の計算が十分に出来ない
 - － 患者に対する指導が不十分
- プロジェクトの狙い
 - － 看護師を対象とした研修によってマラリア疾患の看護能力を強化する
 - － 習得した知識・技術がちゃんと現場で使われるようにする



プロジェクトのアプローチ
(マラリア疾患の看護強化)

- ・ カスケード方式の技術移転
- ・ 研修を受けた人数でなく、看護サービスの質の改善を指標とする
- ・ モニタリング・評価のツールも組み込んだ研修パッケージによる研修内容の標準化

Training Guide

Lesson Plan

Handouts

Flip Charts

Evaluation Tools

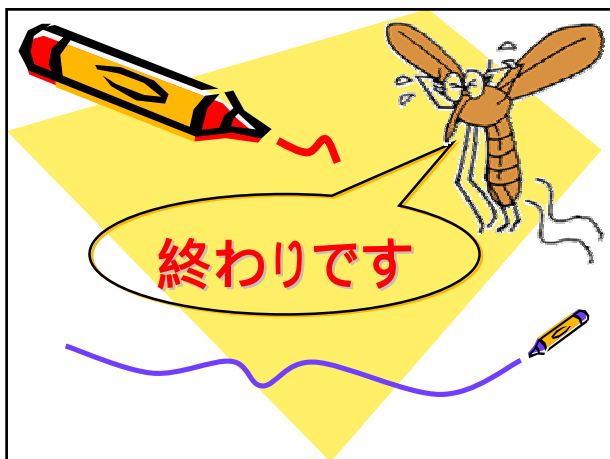
Monitoring Tools

9. ハマダラ蚊から身を守る
～ 長期残効蚊帳 ～

- ・ 繊維に殺虫剤を練りこんで、約 4 ～ 5 年程度殺虫効果がある蚊帳。従来品は、6 か月程度で蚊帳を殺虫剤に浸し直す必要がある。
- ・ 数種類の製品があるが、WHO から長期残効蚊帳として推奨されているのは、日本製とデンマーク製の 2 製品
- ・ 日本が開発した製品は、上海 (中国) とアルーシャ (タンザニア) にて生産

蚊帳の配布

- ・ 2005 年に長期残効蚊帳 26,000 張を提供
- ・ 国際 NGO 「Population Service International」 (PSI) と連携
- ・ 産院等で妊婦及び 1 歳未満児を持つ母親を対象に割引販売
- ・ 売上のうち約 50 セント / 張は保健施設の運営向上に。残り約 2 ドル / 張は PSI が次の蚊帳購入のために積み立て



タンザニアでのマラリア対策(日本の取り組みについて)

1. 「マラリア」とは

- マラリア原虫による高熱症
- ハマダラ蚊を媒介に感染
- 全世界で1年間にマラリアで亡くなる人: 約 100 万人(90%がアフリカ)

2. タンザニアの現状

- 年間 1600 万 ~ 1800 万人のマラリア患者
- 年間 10 万人がマラリアによって死亡
- 外来患者の 30%がマラリア患者
- 医療施設死亡の 25%がマラリアによるもの
- マラリアによる経済的損失は GDP の 3.4%

3. タンザニアの取り組み「成長と貧困削減戦略(2005-10)」

- マラリアによる5歳未満児の死亡率を8%に低下
- 薬剤付蚊帳の普及と適切な使用(長期残効蚊帳の推奨)

4. タンザニアのマラリア政策 ~ 国家中期マラリア戦略2002 - 2007 ~

上位目標

- タンザニアの全 21 州で、マラリア罹患率とマラリアによる死亡率を(1)2007 年までに 25%減少させ、(2)2010 年までに 50%減少させる。

戦略

- マラリア疾患のケースマネジメントの改善
- 蚊帳の使用によるベクターコントロール
- 妊婦へのマラリア予防
- 異常発生への対処と予防措置

5. 包括的マラリア対策プロジェクト ~ プロジェクトの前フェーズ ~

1993 年 ~ 2002 年:

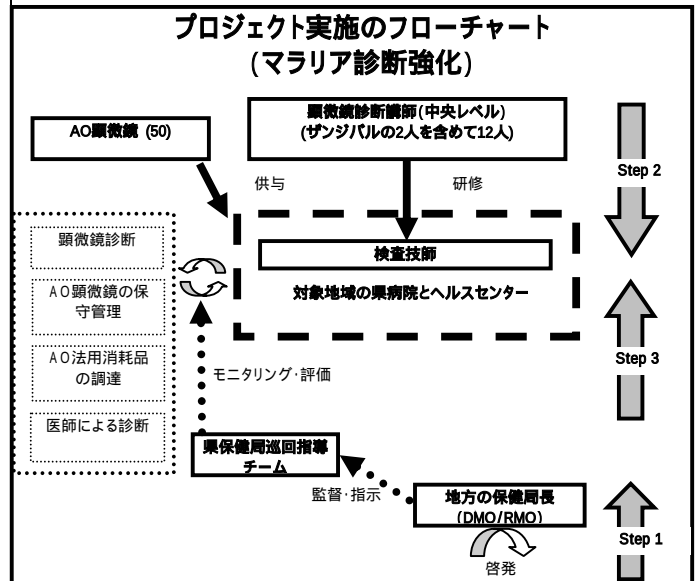
- マラリア対策現地国内研修
 - 1993 年 ~ 1997 年がフェーズ I、1998 年 ~ 2002 年がフェーズ II
 - 臨床検査技師 500 名と看護師 500 名を対象
 - 約 100 台の顕微鏡(アクリジンオレンジ法)を供与
 - 保健省マラリア対策プログラムが主体となって実施、日本人短期専門家も数名投入

6. 包括的マラリア対策プロジェクト ~ プロジェクトの概要 ~

- 期間は 2004 年 11 月から 3 年間
- 対象地域は 12 県程度
- プロジェクトコンポーネントは 3 つ
 - マラリア診断強化
 - マラリア疾患の看護強化
 - ハマダラカ生息地の環境マネジメント

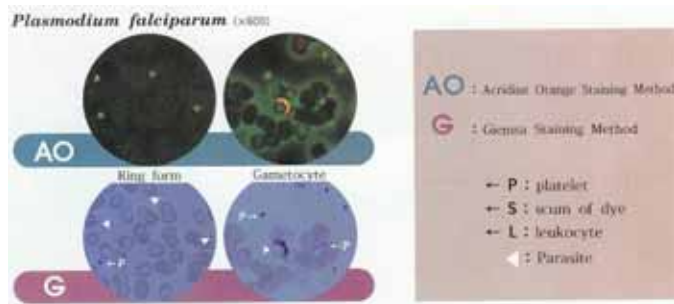
7. 包括的マラリア対策プロジェクト ~ マラリア診断強化 ~

- 現状は?
 - 顕微鏡によるマラリア検査の精度が低い(70%前後)
 - 検査結果が信用されず、マラリア治療薬が過剰に処方される
- プロジェクトの狙い
 - 臨床検査技師の顕微鏡によるマラリア検査技術を強化する
 - 習得した検査技術がちゃんと現場で使われるようにする



アクリジン・オレンジ法(AO法)について

- マラリア顕微鏡診断法の一つ
- 従来のギムザ法より早くて簡単
- 熟練していない臨床検査技師でも正確な診断が可能

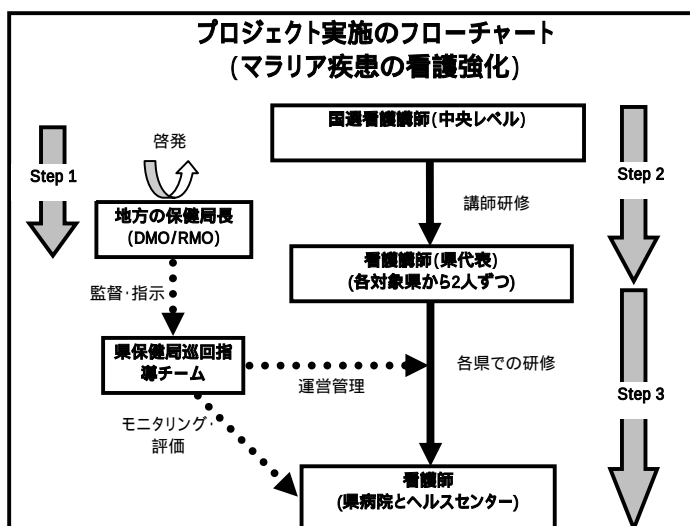


プロジェクトのアプローチ（マラリア診断強化）

- 研修後のモニタリングを重視
- 集団研修だけでなく、各施設での実地研修を採用
- 診断精度の改善をデータで証明

8. 包括的マラリア対策プロジェクト ～マラリア疾患の看護強化～

- 現状は？
 - 看護師がマラリア治療薬の投与基準を把握していない
 - 点滴投与する薬の計算が十分に出来ない
 - 患者に対する指導が不十分
- プロジェクトの狙い
 - 看護師を対象とした研修によってマラリア疾患の看護能力を強化する
 - 習得した知識・技術がちゃんと現場で使われるようにする



プロジェクトのアプローチ（マラリア疾患の看護強化）

- カスケード方式の技術移転
- 研修を受けた人数でなく、看護サービスの質の改善を指標とする
- モニタリング・評価のツールも組み込んだ研修パッケージによる研修内容の標準化

1. Training Guide
2. Lesson Plan
3. Handouts
4. Flip Charts
5. Evaluation Tools
6. Monitoring Tools



9. ハマダラ蚊から身を守る ～長期残効蚊帳～

- 繊維に殺虫剤を練りこんで、約4～5年程度殺虫効果がある蚊帳。従来品は、6か月程度で蚊帳を殺虫剤に浸し直す必要がある。
- 数種類の製品があるが、WHO から長期残効蚊帳として推奨されているのは、日本製とデンマーク製の2製品
- 日本が開発した製品は、上海(中国)とアルーシャ(タンザニア)にて生産

蚊帳の配布

- 2005 年に長期残効蚊帳 26,000 張を提供
- 国際 NGO「Population Service International」(PSI)と連携
- 産院等で妊婦及び1歳未満児を持つ母親を対象に割引販売
- 売上のうち約 50 セント/張は保健施設の運営向上に。残り約 2ドル/張は PSI が次の蚊帳購入のために積み立て



連絡先：

タンザニア共和国
マラリア対策アドバイザー 金森 将吾
JICA タンザニア事務所員 守屋 貴裕

c/o JICA Tanzania Office
P.O. Box 9450, Dar es Salaam, Tanzania
E-mail: s-kana@muf.biglobe.ne.jp (金森)
Moriya.takahiro@jica.go.jp (守屋)

配布資料：援助関係者としてのキャリア形成

UNDP タンザニア アソシエートエキスパート（JPO） 鈴木（ナブ）裕子

UNDP is the UN's global development network, advocating for change and connecting countries to knowledge, experience and resources to help people build a better life.

2003 年、2005 年のローマ、パリにおけるハイレベル援助効果会議や G8、2005 World Summit など、近年の国際コミュニティの Debt Relief, Scaling up of Aid, Aid Effectiveness へのコミットメントに伴い、新しい援助方法（一般財政支援やセクター支援）が模索されており、各国で援助協調が進められている。国連・国連開発機構においても今後国連が開発分野において果たすべき役割を鑑み、国連リフォームが進んでいる。UNDP では新しい事務局長のもと、特に Capacity Development を軸に、MDG S-based Poverty Reduction Strategy、貧困モニタリング、Pro-poor economic growth、Crisis Prevention・Crisis/Post Conflict recovery、ガバナンス、HIV/AIDS、エネルギー・環境などの Practice Areas に取り組んでいる。国レベルでは UN Resident Coordinator's Office (UNRCO) のサポート、また UNRCO のもと、United Nations Development Assistance Framework (UNDAF) プロセスを通じて国連機関の協調、また国によっては援助協調なども行っている。

UNDP タンザニアは 'A Trusted Partner' として、（１）開発アジェンダを保有しリードしていく National Capacity への支援を行い、（２）パートナーシップを重視したプログラムを展開している。UNDP タンザニアでは以下の 4 つの Practice Areas と 3 つの Cross-Cutting issues への支援を行っている。

- Poverty Monitoring and Pro-Poor Policy Development (Support to Poverty Reduction Strategy Development and Implementation, Support to strengthening Poverty Monitoring System, Poverty Human Development Report, etc.)
- Democratic Governance (Elections Support, Support to Parliament, Anti-Corruption, Civil Society strengthening, Human Rights, etc.)
- Development Management and Aid Coordination (Support to Government's External Aid Coordination, Support to Development Partners Group (DPG) in aid coordination, harmonization and alignment, Partnership with the Private Sector)
- Energy and Environment (Grass-roots community development, Promoting renewable energy, etc.)

Cross-Cutting : HIV/AIDS、ICT, and Gender

UNDP タンザニアにおいて JPO として、Development Management and Aid Coordination Unit に所属し、主に援助協調と民間セクター促進の 2 つの業務を行っている。援助協調においてはドナー会合の運営、サポート等事務局機能の他に政策に仕事にも関わっている。民間セクター促進に関しては、民間セクターによる Pro-Poor Investment を促進するための支援を行っている。

以上

現地ODAタスクフォース主催開発セミナー

Youth, Development & Peace Japan Network

今、私たちに出来ること ～ユースからの声～

ファシリテーター
樺澤俊亮 (YDP Japan Network)
プレゼンテーター
石田 彩佳 (アデオジャパン)
高田 沙織 (世界の若者による対話 - RING)
篠原 三津保 (C-fa)
寺尾 恭輔 (CLUB GEORDIE)



プレゼン作成チーム参加団体

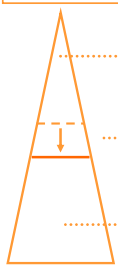
アデオジャパン (東京)
国際医学生連盟 日本 (全国)
CLUB GEORDIE (大阪)
C-fa (東京)
ジャパンプラットフォーム学生ネットワーク (東京)
日米学生会議 (東京)
世界の若者による対話 - RING (関東・関西)
One's 1 (大分)

今、私たちに出来ること



Youth, Development & Peace Japan Network

この発表で取り上げたい問題意識

- 
- 途上国開発に関わっているユース
→ 現場イメージ獲得の機会創出
 - 開発に取り組む人材の拡大
→ インセンティブの付与
 - 開発についての啓発対象となる層
→ 開発教育の充実

今、私たちに出来ること



Youth, Development & Peace Japan Network

開発の現場との距離を縮めるために

担当: 石田 彩佳 (アデオジャパン)

開発の現場をイメージできる

- ユースの活動や勉強の質が高まる
- 職業として携わる前に正確なイメージを持てる

開発の現場との距離を縮めるために



Youth, Development & Peace Japan Network

問題意識

途上国開発に携わる職業に就く上で、あるいは研究や勉強をしていく上で、現場の活動のイメージを得る機会が少ない。

- 多くの海外研修の制度は休学を強いる
- 開発の現場を知ることのできるセミナーの不足

開発の現場との距離を縮めるために



Youth, Development & Peace Japan Network

社会の中で必要なこと

- セミナーの継続的な実施・地方での実施
- 大学の授業と現場の連携促進
- 短期インターンシップ制度
- 途上国との交換留学制度を奨励する社会づくり(学校・企業・政府の連携)

開発の現場との距離を縮めるために



Youth, Development & Peace Japan Network

ユースが出来ること

ユース同士あるいはユースと社会の間で、現場を志向したネットワークを構築する

- ・ユースによるユースのための活動報告の充実
- ・スタディーツアーなどでODAタスクフォース訪問を可能に

開発の現場との距離を縮めるために



Youth, Development & Peace Japan Network

開発問題に取り組む人材を増やすために

担当：高田沙織(世界の若者による対話 - RING)

どうすれば途上国開発へ関心を持って取り組む人材を確保できるのか

途上国開発に取り組むことへの
「インセンティブ」が社会の中に必要

開発問題に取り組む人材を増やすために



Youth, Development & Peace Japan Network

問題意識



開発問題に取り組む人材を増やすために



Youth, Development & Peace Japan Network

社会の中で必要なこと

社会の中で、開発問題に取り組むことへのインセンティブを出せるような仕組みを整備していく

- ・「NGO: スキルアップ・キャリアアップの場所」という地位を確立する
- ・Awardや奨励金、大学の単位認定制度を整備していく
- ・社会起業家を輩出していく基盤を整える。

開発問題に取り組む人材を増やすために



Youth, Development & Peace Japan Network

ユースが生み出せるインセンティブ



開発問題に取り組む人材を増やすために



Youth, Development & Peace Japan Network

そのために必要なこと

課外活動の一分野として「学生団体・ユース団体: スキルアップの場所」の地位を確立する。

- ・学生団体合同での新歓
- ・学生団体を対象としたトレーニングの機会の創出



開発問題に取り組む人材を増やすために



Youth, Development & Peace Japan Network

よりよい開発教育のために

担当: 篠原 三津保 (C-fa)

子どもたちに途上国の現状を伝える教育を

私たちユースからも、日本の開発教育を
よりよいものにするため活動していこう

よりよい開発教育のために



Youth, Development & Peace Japan Network

開発教育におけるユースの意義

- ・近い世代による教育の効果
(一緒に考える→主体性を引き出す)
- ・開発と教育の間にバランスのとれた位置にいる
- ・教える側も一緒に学んでいくことができる



よりよい開発教育のために



Youth, Development & Peace Japan Network

日本の開発教育において必要なこと

問題

- 途上国の人々との共存を身近に感じる機会が少ない
- 生の情報、現場の声を届ける工夫が必要
- 参加型の授業

問題

- 開発教育についての情報・ツールが散在している
- 日本の開発教育は各地に散在しネットワークも水面下
- 開発側からも、教育側からも、日本の開発教育を
共に作り上げていけるような協力体制が必要

よりよい開発教育のために



Youth, Development & Peace Japan Network

今、私たちに出来ること

開発の現場、ユース、教育の現場
三者の間にネットワークを

ユースにできること

- ・草の根の開発教育活動
- ・開発教育カリキュラムへの提言
- ・開発教育を担える人材育成

よりよい開発教育のために



Youth, Development & Peace Japan Network

個人としてできること

担当: 寺尾 恭輔 (CLUB GEORDIE)

参加者の皆さんに提案したい3つのアクション

1. 小さなコトからコツコツと！
2. ミーハ - になりませんか？！
3. 自分に合った国際協力スタイルで！

個人としてできること



Youth, Development & Peace Japan Network

小さなコトからコツコツと！

開発分野……テーマの大きいものばかり
↓
社会へのインパクトを求めてしまいがち

まずは身近な人へ一人一人
伝えていくことも大切！

個人としてできること



Youth, Development & Peace Japan Network

ミーハーになりませんか？！

現在の流行は少なからず
開発に関係のあるモノも多いのでは？！

↓
流行のモノは無関心層の人でも食い付きがいい！

**流行の最先端の人となり社会と
開発の掛け橋に！！**

個人としてできること



Youth, Development & Peace Japan Network

自分に合った国際協力スタイルで！

国際協力・・・難しいイメージを持たれがちでは？！

↓
日本にはいろんな形で国際協力をしている人がいる

**自分に合った国際協力のスタイルを！
見つけた人は身近な人の
開発コンサルタントを！！**

個人としてできること



Youth, Development & Peace Japan Network

**バングラデシュ・タンザニア現地ODAタスクフォース主催
援助の現場と日本を結ぶ開発セミナー
「途上国の人たちとともに未来を創る！」**

途上国の人たちとともに未来を創るために、これからみなさんご自身で
取り組んでみたいこと、できると思われることは何でしょうか？

途上国現地で働く日本人援助関係者への質問や期待していることがあり
ましたらお聞かせください。

この用紙は回収した後、セミナー会場内で掲示させていただきます。

アンケートのご協力をお願いいたします。

チラシ 主催協力団体 HP/メールマガジン () 知人の紹介
その他 ()

現地 ODA タスクフォース概要説明（バングラデシュ・タンザニア）		
ダッカの都市環境を知ろうツアー	開発セミナー編	水道公社の経営再建
ダッカのストリートチルドレン支援活動		マラリア対策
援助関係者としてのキャリア形成		YDP JN からの発信
全体討議		

その理由を教えてください：

はい いいえ どちらともいえない

満足 やや満足 不満 どちらともいえない

--

ご職業	学生 公務員・教員 民間企業（種別： ） 自営業・自由業 主婦 パート・アルバイト その他（ ）
性別	男性 女性

外務省・JBIC・JICA